

# 武蔵野から伝える

## 戦争体験記録集（第Ⅳ集）

令和5年度

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会

武蔵野市



## はじめに

非核都市宣言平和事業実行委員会は、市民団体や平和・交流団体、PTA、大学生、公募市民をメンバーとする十数名で構成されており、武蔵野市との共催により、平和啓発イベントを開催するなど、市民の皆様には戦争の悲惨さや平和の大切さを伝える活動を行っています。

非核都市宣言から25年が経過した平成19年度に、非核都市宣言25周年記念事業実行委員会ができ、平成20年には非核都市宣言平和事業実行委員会を設置し、以降平和の大切さを伝える事業を実施しています。

戦争を体験された世代の高齢化が進む中、私たち実行委員会は、次代を担う若い世代の人たちに武蔵野にかつてあった空襲の歴史を継承していく活動に一層力を入れていかなければならないと考えています。

ロシアによるウクライナ侵攻の状況が日々伝えられています。私が十歳の時の空襲体験がよみがえります。大きく傾いた中島飛行機武蔵製作所の時計台、折れ曲がったのこぎり屋根、瓦礫の山、無数の爆弾の穴など恐怖と悲壮な光景が重なります。非核都市宣言平和事業実行委員会の委員として長らく携わってきた市民として心を痛めているところです。

国際的な紛争を平和的に解決するためには、国際連合

の果たす役割はますます大きくなると考えます。あのような空襲の悲劇を二度と繰り返さないために、武蔵野から世界に向けて平和への願いを発信し続けてまいります。このたび、市内にお住まいの戦争体験者の方や戦時中に市内で被災された方の体験談をお寄せいただきました。また、戦争遺産や遺品、当時の写真など貴重な資料もご提供いただき、戦争体験記録集第IV集として発行することができました。

この取り組みが少しでも若い世代へ平和な未来をつなぐ一助となることを願っています。

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会

委員長 中里 崇亮

## 戦争体験記録集の発行に寄せて

このたび、「武蔵野から伝える戦争体験記録集第Ⅳ集」を発行いたしました。平成22年、平成24年、平成27年に続く4回目の発行となります。

武蔵野市では、戦時中、市内の空襲で犠牲になられた方々に哀悼の意を表するとともに、戦争の記憶を継承し、平和の尊さを次世代につないでいくため、初空襲のあった11月24日を平成23年に「武蔵野市平和の日」と制定し、平和パネル展や講演会などの催しを開催しております。

武蔵野市平和の日条例の前文には、「市民とともに国際相互理解の推進に努め、恒久平和の実現を目指すことを誓う」とあります。

昨年2月のロシアによるウクライナ侵攻など、世界各地では国内・国際的な紛争が続いています。未来の子どもたちに戦争も核もない平和な世界を継承していくために、国内外の自治体と連携し、これからも戦争の悲惨さと平和の尊さを武蔵野市から積極的に発信し続けてまいります。

戦後78年が過ぎ、戦争を体験された方から直接体験談を聞く機会も大変貴重になっています。私たちには、この「体験の記憶」を語り継いでいく使命があります。貴

重な記憶を風化させず、未来へつないでいくため、今後も若い世代に武蔵野の空襲の歴史や戦争体験の記憶を継承しながら、戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えていく活動を市民の皆様とともに取り組んでまいります。

この度、貴重な体験談をお寄せいただきました十六名の皆様に感謝申し上げます。たくさんの方に読んでいただければ幸いです。

武蔵野市長 松下 玲子

目次

一 市民の戦争体験

第一部 武蔵野の空襲とその記憶

一 私の戦争体験

高橋 健一

1

二 中島飛行機への学徒動員と姉の従軍

田地 志奈子

5

三 私の戦争体験

中島 敬子

8

四 私の戦争体験

中村 勇

13

五 私の戦争体験

中村 弘

16

六 私の戦争体験

平沼 昇

19

七 武蔵野で過ごした戦前・戦中・戦後

藤縄 達夫

22

八 武蔵野での戦争体験

山中 富枝

28

第二部 市民の心に残る戦争体験

九 浜松市での空襲と疎開

岡本 徳子

32

十 私の戦争体験

加藤 昭二

36

十一 恐ろしかった五歳の夏

〜広島での被爆体験〜

木岡 紀久代

38

十二 私の戦争体験

猿渡 松子

42

十三	私の戦争体験	杉崎 和子	47
十四	戦時中のはなし ↳阿佐ヶ谷、三鷹（武蔵境）、 米子時代を振り返って↳ 知和 晴子		50
十五	三度の疎開経験 山田 シズ		56
十六	私の戦争体験 余田（旧姓・赤松） 縁		60
二	中島飛行機武蔵製作所の記録		64
三	年表・工場配置図		67
四	平和に関する条例、宣言		69

◎編集にあたって

- ・表記については、当時の呼称に従いました。
- ・原稿の編集に際しては、内容や主旨をそこなわないように配慮しながら、読む方に分かりやすいように補足・再編集し、一部注釈をつけました。
- ・体験談の内容は、原則、体験者の記述、聞き取りを尊重しています。

# 一 市民の戦争体験

## 第一部 武蔵野の空襲とその記憶



## 一 私の戦争体験

吉祥寺北町

高橋 たかはし  
健一 けんいち

### 高橋家の話

武蔵野市史に江戸時代の明暦の大火により家を失った人が移り住み吉祥寺村ができたことが記載されていますが、私の祖先もそのときに移住した一人でした。当時の消防は「破壊消防」と言われ、火災時は、延焼を防ぐため、周辺の家も燃える前に取り壊されました。家を取り壊された祖先が、吉祥寺北町五丁目の千川上水沿いから五日市街道あたり一帯の土地を開墾し、農業を始めました。現在北町郵便局があるあたりに本家があり、私の祖先は分家にあたります。

私の祖父はなんでも捨てずにとっておく人だったので、自宅には江戸時代から使っていた農具や戦前の資料も残っています。私は昭和十五年生まれで、終戦の年には六歳なので、戦争の記憶はあまりありませんが、祖父から囲炉裏端でいつも話を聞いており、当時の資料も残っているのです。記録として残せればと思います。

戦前は家父長制で、囲炉裏の真ん中に祖父（家長）、隣に父（長男）、その隣に私（長男の長男）が座ります。

母は囲炉裏にはあたれず、台所で食事をしていました。

我が家は代々農家で戦前はウドや麦、野菜のほか養蚕用の桑などを作っていました。仕事で使う資材や家財道具、食料品などは田無まで買いに行っていました。この辺りは畑しかありませんでしたが、田無は奥多摩や埼玉から江戸城に物資を運ぶ中継地点の宿場町として栄えていました。

戦後の農地改革で、小作人にも土地が与えられるようになりましたが、土地が与えられた人は土地を売却して別の事業を始める人も多く、先祖代々の土地を守って今も農業を続けているのは地主が多いと思います。

### 中島飛行機武蔵製作所

昭和十三年に中島飛行機武蔵製作所が建てられました。この工場では、三菱重工業製の戦闘機「零戦」のエンジンも作っていました。

余談ですが、零戦の名前は、昭和十五年に神武天皇即位紀元二千六百年の祝賀行事が行われた年に製作されたことから、紀元下二桁から零戦と名付けられたものです。

中島飛行機工場の外観写真や製作された飛行機の写真は残っていますが、工場内外は軍事機密なので、当時は

憲兵隊が見回りしており、撮影は禁止されていました。

工場の従業員は約四万人ほどいたと言われていました。当時、三鷹駅の南口の方から工場へ行くためには、ぐるっと遠回りをしないとたどり着けなかったのです、働く人たちのために三鷹駅武蔵野口（現在の北口）が作られました。



中島飛行機製 零戦のエンジン  
の一部（シリンダー）

中島飛行機武蔵製作所への空襲の際には、私が四歳か五歳でしたが、この辺は赤土を掘った崩れにくい防空壕なので大丈夫だろうと疎開はしませんでした。

エンジンが作れなければ飛行機は飛べないので、アメリカ軍は何が何でも工場を破壊したかったのだろうと思います。日本軍も身を挺して戦い、アメリカ軍に打撃を与えました。中島飛行機を守るために久我山の地区に一万メートルまで飛ぶ高射砲を作り、B 29を落とせるようになったのは終戦間際でした。

### 配給制

戦時中は食べ物がなく麦やさつまいも、小松菜、ほうれん草などを食べていました。白米はぜいたく品だったので、戦後も高校一年生になるまで食べたことがありませんでした。

生活必需品は配給制になり、切符を持参して交換する制度は戦後まで続きました。



第6号みそ	第6号みそ	第3号みそ	第3号みそ
引換券 其数 出庫所印	子約券 其数 出庫所印	引換券 其数 出庫所印	子約券 其数 出庫所印
第5号みそ	第5号みそ	第2号みそ	第2号みそ
引換券 其数 出庫所印	子約券 其数 出庫所印	引換券 其数 出庫所印	子約券 其数 出庫所印
第4号みそ	第4号みそ	第1号みそ	第1号みそ
引換券 其数 出庫所印	子約券 其数 出庫所印	引換券 其数 出庫所印	子約券 其数 出庫所印

1世帯に1通発給される配給通帳  
通帳に印鑑を押してもらうのと引き換えに米や味噌などと交換する

幸いにも私の家は農業をやっていたので食べる物がありましたから、食料と交換するために持ってこられた和服やタンスなどが倉庫に積まれていました。当時の写真を見ると下駄を履いて、格好いい服を着ていますが、こ

れは食料と交換した国民服の新品があつて、母が改良して着させてくれたようです。

## 父の出征

徴兵検査の結果、父親は健康で体格が良く、甲種合格で兵隊になり、終戦までずっと戦地にいました。父は満洲、ビルマ（ミャンマー）、仏領インドシナ（ベトナム）、オランダ領東インド（インドネシア）へ兵士として行きました。最後はインドネシアでオランダ軍の捕虜となり収容所にいたようですが、昭和二十一年、私が小学校一年生になる前に帰国できました。

日本が東南アジアへ進出したことについて非難する報道もよく耳にしますが、父から聞いた話では、ベトナムでは、現地の人は数百年の間、白人から牛馬以下の差別的な扱いをされていたところ、同じ東洋人である日本軍が短期間で白人を追い出したことに驚いていたと聞きました。インドネシアは、敗戦後、日本軍が引き上げ時に残置した武器により、オランダから独立した歴史があり、欧米諸国からの解放の一役を担ったと言われています。

## 慶應義塾大学医学部の移転

昭和二十年五月の空襲で慶應大学医学部が焼け、現在の武蔵野市立第四中学校のところに医学部と付属病院が置かれました。当時は空調設備もなく、夏は窓を開けばなしなので、子供の頃医学生が人体解剖をする様子がよく見えました。東伏見に早稲田大学の水泳部があり、武蔵野の屋外プールで早稲田と慶應の水泳部の早慶戦を見学したことを覚えています。叔母がもらった慶應病院の薬袋も残っていますが、病院は三年後、元の場所（現・信濃町）に本館が完成し戻りました。



慶應義塾大学病院の薬袋と容器代の預証

## 戦後

終戦のときには六歳でした。日本が戦争に負けてアメリカ軍が来ましたが、保谷のガスタンクなど生活に必要な

な施設は破壊されず残っていたので、アメリカ軍は勝利して日本に住むことまで見据えていたのではないかと言われています。

現在のグリーンパークにアメリカ軍兵舎がありました。文字を学んでいないのか、自分の名前も書けない兵士がたくさんいて、日本の義務教育はすごいと思いました。両親から乞食みたいなことすると言われていたので、米軍の兵士からお菓子を貰うようなことはしませんでした。

市が購入した旧赤星鉄馬邸は米軍に接收されていました。他にも近所の西洋館のような家では、米軍に接收されないまでも、家具などを全部持って行かれてしまったところもあり、「戦争だけは勝たなきゃだめね」と話していました。戦後は、米軍に家や金銭、情報などを提供すれば、それなりの地位が与えられたので、協力する日本人がいたのだと思います。

戦時中に飛行機を作っていた技術者達がいきましたが、日本は、アメリカから七年間飛行機を作ってはいけないという命令を受けました。飛行機を作れなくなってしまう技術者達は、車など他の乗り物に力を注いだので、今では日本の自動車や鉄道のメーカーは世界に広く知られるようになりました。

## 若者へメッセージ

愛国心を持ってほしいと言うと、鉄砲を持って戦えと言っているように誤解されがちですが、そうではなくて、自分の国を大事にすることが必要だと思います。先ほど紀元二千六百年祭の話をしました。日本は長い歴史をもつ国です。自分の国を大事にすることが、相手も大事にすることにつながると思います。



## 二 中島飛行機への学徒動員と姉の従軍

田地<sup>たじ</sup> 志奈子<sup>しなこ</sup>

### 生い立ち

私は四人姉妹の次女として、目白で生まれました。目白には徳川という名字の人ばかりが集まっている場所があり、学習院がありました。父は仕事に一生懸命な人でした。父だけでなく、みんなが一生懸命に働いて、幸せになろうとしていました。

隣の家に立派な桜の木が二本あり、ご近所の方とお花見の会をやるので見せてくださいとお願いしました。普段はお互いの家が見えないように、葉の茂る植物を植えてありましたが、お花見のときは一緒に桜を見ました。

私が小学生のころに戦争が始まりました。目白から西荻窪、巣鴨と移り住みました。三番目の妹は神田に移り住み、末の妹は祖母と一緒に疎開しました。

学校の先生たちも戦争に行ってしまう、ほとんどが女性の先生でした。小学六年生のときに初めて男性の先生が担任になったのを覚えています。

小学校卒業後、私は第五高等女学校に通いました。

女学校にも軍人が必ず一人はいて、朝礼台に立っていました。「かしら、右」で敬礼して四列で歩きました。

### 中島飛行機への空襲

第五高等女学校に通学していたとき、中島飛行機に学徒動員されました。夜間も働きました。男性は出征していたので、工場には高齢者や女性、身体障害者しかいませんでした。

私は大きなボール盤を使って金属に穴を空ける仕事をしていました。作業中に指をけがしたこともありました。ボール盤を握ったまま、痛みで手を放せなかったのを覚えています。

中島飛行機での作業中、警報が鳴って素掘りの防空壕に逃げました。夜だったと思います。近くに爆弾が落ちるのではないかとハラハラしているときに、誰かの指示で「みかんの歌」を歌いました。「みかんにはかぞくがあるね、太つて父さんに似たの、子を抱いて母さんに似たの、兄弟姉妹<sup>きょうだい</sup>でみんな仲良く並んでる」とみんなが歌いました。どうしてその歌を歌ったのかは覚えていません。もしかしたら、ラジオで流れていたのかもしれない。誰の指示で歌ったのかは覚えていませんが、みんな夢中で歌っていました。気持

ちが安心したのです。

## 姉の従軍

隣組の男性は、どんどん出征していきました。私の兄弟には男性がいなかったため、「お国の役に立てない」とよく言っていました。五つ年上の姉も「隣組のみなさんは出征しているのに、うちはお役に立てない」と言っていました。

まだ東京大空襲に遭う前、陸軍でタイピストを募集していました。母は「危ないから」と姉を止めましたが、満州に行ったばかりの父は賛成しました。姉はタイピストに志願しました。

姉はフィリピンに向かう輸送船に乗りました。寄港した神戸や台湾から、船の様子が描かれた手紙が送られてきました。ほとんどはひらがなと漢字で書かれています。検閲を意識したのか、カタカナと漢字で書かれた硬い文章もありました。実際に検閲された手紙もあり、封筒に「検閲済 大日本帝国通信省」と書かれたテープが貼られていました。

姉は家族以外に、親戚やお手伝いさんにも手紙を送っていたようです。船での生活や訓練がとても大変なものだということが手紙に書かれています。

昭和十九年九月に姉が乗っていた瑞穂丸が攻撃され、遭難しました。遭難直前に台湾の港で書いて、病気のため帰国する方に預けたのでしよう、姉から父に宛てた手紙が残っています。姉はそのまま亡くなり、骨は帰ってきませんでした。箱が届けられましたが、中身は空っぽでした。姉の死後、姉が親戚やお手伝いさんに宛てて書いた手紙をもらいました。

## 東京大空襲

昭和二十年三月の東京大空襲で巣鴨の家が焼けてしまいました。姉からの手紙は、母が大事に持っていて無事でした。

空襲後、母や妹と一緒に、父の弟を頼って王子に疎開しました。私が疎開先にいる間に終戦を迎えました。

## 今思うこと

やっぱり、戦争はよくないです。結局、人間は何度も戦争を繰り返しています。みんなが幸せになるような世の中にならなければいけないと思います。



### 三 私の戦争体験

吉祥寺北町

なかじま 中島

けいこ 敬子

#### 家族のこと

昭和十年生まれ。吉祥寺の蓮乗寺の向かい、現在の第一ホテルの北側に住んでいました。戦争が始まったのは6歳の時です。小さいときは親がなんでもやってくれましたが、家の裏に防空壕を掘る手伝いをしたことは覚えていません。赤土なので、下から水がしみ出て、ビチョビチョで座れないので、ずっと立っていました。狭いので、親は家の中にいて、子供だけを防空壕に避難させていました。

爆撃機は何度も見ていましたが、目の前に爆弾が落ちたことではないので、よく言われているほど怖さは感じていませんでした。「日本の上空をなんでアメリカの飛行機が飛んでいるの？」と不思議に思う程度です。疎開も食糧難も経験しました。親は大変だったと思いますが、小さいころは親がなんでもやってくれたので、戦争が大変という実感がありませんでした。

本当につらかったのは、後述する戦後の体験です。

父は宮城の出身で、馬具職人の家に丁稚奉公しているときに母と結婚し、一文無しのまま二人で東京に出てきて、電気工事の仕事を始めました。三誠社という会社で戦後、武蔵野

市役所や第一中学校の電気工事の仕事も請け負いました。

父は、女性は男子を産むべき、長男は家業を継ぐべきという昔ながらの考えを持っていましたが、長男は乳児脚気で生後6か月の時に亡くなり、次男（私の兄）は戦後、研究者の道に進みました。原爆投下の報を受け、原子力を人のためになることに使いたいと話していました。湯川英樹博士の元で素粒子論を学びたいと、親に内緒で東大の理科二類に入学し、素粒子論の研究をしました。兄に家を継いでほしいと言っていた父も、国のためになることならどんなやっただいほうがよいと言い、科学の発展や人類の未来に貢献したいという兄の思いを認めていました。

後に兄は東芝の原子力技術研究所の所長になり、放射線科で使用する医療器具の開発や癌治療用機器の研究をしました。原子炉で作業中の事故で被曝したことから癌を患い、若くして亡くなりました。

#### 叔父さんのこと

父の弟（私の叔父）は、戦争に反対していました。憲兵隊から口を切るぞと脅されても反対し続けていたそうです。召集令状が届きましたが、戦争反対と言っていたため、牢屋のようなところで生活していました。私が七歳の頃、叔父が収容されていた施設が空襲され亡くなったと聞きました。私がかわいがってくれた優しい叔父さんだったので、亡くなった

と聞いたときは大泣きしました。

## 疎開

戦争が激しくなり、父の仕事関係の知り合いを頼って、栃木県の吉水（現在の佐野市）に、母と中学生の兄と2歳下の妹と疎開しました。家族四人で馬小屋を借りて住みました。父は仕事のため東京に残り、姉が父の食事の用意などをしました。

疎開先では、東京っ子は弱い、賢くてすましてるなどと言われるので、子供ながらにどうしたらなじめるかをいつも考えていました。そのため、何かお手伝いをすれば受け入れてもらえるのではないかと考え、学校へ行く前に麦踏みなどの農家の仕事を手伝い、放課後、「おともり（子守）するよ」と言って、近所の子の子守をしていました。

農家では、農繁期は家族みんなで作業するため学校を休みます。私は学校に行ってもよいのですが、働かなくてよい金持ちといじめられるのが嫌で、学校を休んで井戸の水を汲んだり、桑の実を取ったり、薪拾いの手伝いをしました。

東京大空襲は疎開先で見ました。栃木から東京が赤く燃えているのはつきり見え、火が飛んでいく様子もわかりました。東京が全部燃えちゃうと思いい、家族で泣きました。

東京大空襲の後、栃木県から汽車で東京に戻りました。母は体調悪く客席にすわりましたが、私たち子供は汽車の連結

器にひもで結び付けられて帰ってきました。子供なので疲れも知らないし、母と一緒になのでつらいとは思っていませんでしたが、そのころから肩を縮めて手をぎゅっと握る癖がついています。無意識に緊張していたのだと思います。

吉祥寺に帰ってきてから中島飛行機工場を空襲する飛行機は何度も見ました。

私の姉の夫（義兄）は中島飛行機に勤めていました。義兄は命は無事でしたが、空襲で工場が壊されたことにより、職を失いました。

## 天皇陛下万歳

戦時中の小学校では天皇は神であると学びました。「天皇陛下」という言葉を発するときには起立し正しい姿勢にならないと教わりました。

私の従弟は早稲田大学に行っていました。学徒出陣で特攻隊に選ばれ、飛行機ごと体当たりして亡くなりました。突撃する際は、「天皇陛下万歳！と言って死ね」と言われるのですが、ほとんどの人は、「お母さん」と叫びながら向かっていったと聞きました。子どもでも出征するということは死に行くのと分かっていたので、若い人たちが出征するとき、近所の人たちが総出で「万歳」「おめでとう」と送り出しているとき、私は母に「どうして戦争行くのにおめでとうと言うの？家族の人が泣いているのに、なぜ近所の人はおめでと

うと言うの？」と聞きました。そんなこと言ったら憲兵隊に連れていかれると母に怒られました。

玉音放送は正座して聞かされました。その時も「天皇陛下は神であると聞いていたのに、なんでラジオでしゃべっているの？神様なのになぜ軍服を着て馬に乗っている写真があるの？」と聞いて母に叱られました。

戦争に負けたことはわかりましたが、その時はまだ負けたことの本当の辛さは分かっていませんでした。

## 進駐軍

朝霞、立川、福生に米軍基地がありました。私の家の前は公園通りなのでジープがよく通っていました。ある日、家の前で女の人が赤ちゃんを抱いて車をよけるように電信柱の横に立っていました。ジープがその前に止まって、アメリカ兵が赤ちゃんを女の人から抱き上げました。私はこの人は赤ちゃんがかわいくて抱き上げた優しい人なんだなと思って見ていました。すると、赤ちゃんを道路に置き、ジープにサツと乗り込むと、ジープをバックさせて赤ちゃんを轢いて行きました。赤ちゃんはペッチャンコ。お母さんは失神して倒れました。アメリカ兵は噛んでいたガムを電信柱にくっつけて帰って行きました。その時初めて、戦争に負けるってこういうことなのかと痛感しました。

ジープっぽい車を見ると、今でも思い出して体が震えます。

また、年頃の女性は男性の格好をしないと暴行される危険があると言われていました。十八歳の姉は坊主頭にしていました。私は小さかったのでその心配はなく、姉に「なんで男みたいな格好しているの？」と聞くと「これが世の中というものよ」と話していましたが、後になって暴行されると怖いからということがわかりました。

## 父のこと

ある晩、父がいつもより遅く、くたくたになって仕事から帰宅しました。理由を聞くと、自転車で帰る途中、突然ジープが止まり、日本人通訳が降りてきて、車に乗っているアメリカ兵が学校の周りをジープと自転車で競争しようと言われたとのことでした。何周もさせられ、ジープと自転車なので、当然勝てるはずもなく、「負けてごめんなさいと謝れ」と言われ、謝ると、アメリカ兵は手をたたいて喜んだそうです。

父は自転車で走らされたこと、アメリカ兵に謝ったことよりも、通訳者が日本人だったことにやり場のない怒りを感じたと話していました。日本人通訳はどうしてそんなことは辞めたほうがいいと言ってくれなかったんだろうと話していました。

## 食糧難の時代

戦争中は物資が手に入りませんでした。

配給制になり、カンパンの中には小さい虫が入っていることもありました。小さい虫やイナゴは貴重なタンパク源でした。アリンコも土も食べたいと思うくらい、おなかペコペコでした。親は自分の食事を削って、私たちに食べさせてくれていました。一個の梅干しを兄弟で分け合って食べました。梅干しの種も「すっぱいの残してね」と言いながら、みんなですしずつ舐めてご飯を食べました。白米ではなく、トウモロコシやヒエ、アワなどが混じったものです。カボチャやジャガイモの皮も捨てずに食べました。サツマイモは農林一号という品種で、羊羹が崩れたようなべちよべちよのサツマイモでしたが、ほかに食べられるものがないので、「サツマイモさんありがとう」と言いながら食べました。小豆の配給もありましたが、砂糖は手に入らないので、小豆と塩とメリケン粉で塩汁粉を作って食べました。栄養不足なので、家族は皆「鳥目」になり、夜になると目がかすんで、本などの文字を見るのはもとより、手探りで物を探すような状態でした。戦後、吉祥寺のハモニカ横丁のところに闇市があり、五枚入りのビスケットをみんなに分け合って食べたことを覚えていません。戦争中は甘いものは食べたことがなかったので、お菓子が食べられることがうれしかったことを覚えていません。

小学校五年生の時に給食が始まりましたが、当時は、真っ黒いコップパンと真っ黄色のマーガリンくらいでした。今の子は本当に恵まれていると思います。

## 教育改革

中学生になる時に、学校の制度が大きく変わりました。六・三・三制が導入され、第一国民学校が第一小学校になりました。旧かな使いから新かな使いになり、「てふてふ」が「ちようちよう」に、横書きするときは、左から右に書くよう変更になりました。中学では英語が必修科目に加わりました。英語を見ると赤ちゃんを轢き殺したアメリカ兵を思い出すので、嫌いです。今でも、「ベーカリー」などと横文字のお店にはあまり入りたくありません。

市内の公立中学校は第一中学校一校のみで、一学年五〜六クラスくらいありました。中学校に進学する女子はまだ少ない時代でした。第一中学校には男子学生が行くので、女子学生は、旧帝国第一女子中学校（現在の吉祥女子中学・高等学校）に委託生として入学できました。母は小学校しか出ておらず、お金もあまりない中、自分の子どもはせめて高校は卒業させてあげたいと、学費を出してくれました。制服も買わなければなりません。両親は苦勞したと思いますが、ありがたかったです。

## 子どもたちに伝えたいこと

今は物があり過ぎて、物を大切にしなくなったように感じます。

昔は短くなるまで鉛筆を使っていたし、あちこちに防火水槽があり、雨水をためて火事などの時に使っていました。自家用車などないので、兄が盲腸になった時はリヤカーに乗せて病院に行きました。両親がそのような苦勞をしているのを見ていたので、感謝の気持ちや思いやりの気持ちを自然と学びました。

生活が便利になるのは良いことですが、なんでも簡単に手に入ると、深く考えなくなるのではないかと心配になります。何もなければ、ない中でできることを考え、工夫して生活できます。

お米一粒、水一滴、無駄にしてほしくありません。何より命を大事にしてほしいです。人を殺すのも自分を殺すのもダメです。命を大切に考えれば、戦争をすることはなくなると思えます。未来の子どもたちに伝えたいことです。



## 四 私の戦争体験

関前

なかむら 中村

いさむ 勇

### 戦前

昭和八年に七人兄弟の末っ子として武蔵野町関前村で生まれました。当時は産めよ増やせよの時代だったので、七人兄弟は珍しくありませんでした。

昭和十二年に小学校に入学しました。市内に小学校は第一小学校と第二小学校の二校のみ。関前村（現在の関前と八幡町）と境村（現在の境と境南町）の子どもは第二小学校に通いました。

私の家の横には武蔵境駅から浄水場への貨物を運ぶ鉄道線路がありました。後に中島飛行機武蔵製作所ができ延長されました。現在のグリーンパーク遊歩道はその線路跡です。戦前は蒸気機関車が走っていたので、小学生の頃は、線路に耳を当て、汽車の音が近づくくと、友達と「汽車が来たぞー」と叫び合って遊んでいました。

この辺の農家は草ぶき屋根でした。風の強い日はSLから火の粉が飛ぶので、屋根が燃えないよう家の周りに防火林を植えていました。屋根を葺き替える時は村中の人が総出で行いました。途中で雨が降ると困るので、一

二日で完成するよう、小さい子どもも手伝いました。

その頃のおやつといえば、ニツキの皮を紙で巻いたものが大好きでした。この辺りは養蚕が盛んだったので、桑の実をとって食べたり、畑に野菜がある時期は、ポケットに塩を入れておいて、きゅうりを取って塩を付けて食べたりしていました。

### 戦争が始まって

戦争中はひどかったです。食べ物が手に入らなくなりました。私の家は農家でした。この辺りは水利が悪く米が取れないので、麦やサツマイモを作っていました。サツマイモの苗を植えても、苗ごと盗まれてしまいました。

米軍の飛行機が電波妨害でテープみたいな銀紙を撒き、それが大量に空を舞うので、朝はこれを拾ってくずやに売っていました。

小学校へ行っても、空襲警報が鳴るとすぐ家に帰されました。でも家に帰るともう家族は逃げていて誰もいないので、近所の人と一緒に逃げました。当時は、家族が固まって逃げると一家全滅してしまうので、別々の場所に逃げようと話していました。防空壕は家庭ごとに勝手に掘った穴なので、近くに爆弾でも落ちれば、簡単に埋

まってしまうようなものでした。空襲警報が解除になり、家に帰って家族がそろると、父が今日もみんな生きていてよかったですと話したことを思い出します。

戦時中は、食べる物だけでなく油燃料が不足していました。政府が松の根から松根油を採取するため、大人たちは勤労奉仕を命じられ、松の根を掘りに出かけていました。私は小学生だったので、仕事はさせられませんでした。私は小学生だったので、仕事はさせられませんでした。腹が減るとそこらの葉っぱを食べて我慢していました。

当時は明日生きていられるかわからず、その日を生きるのに精一杯でした。もっとおいしいものが食べたいとか、何がしたいとか考える余裕はありませんでした。

### 高射砲陣地

現在の武蔵野赤十字病院の辺りと第五中学校の近くに、高射砲陣地ができました。

第五中学校周辺の土地は、元々我が家の土地で、三町歩ほどありましたが、ある日、国から高射砲陣地を作るから一週間以内に土地を提供するようと言われてました。国の命令は絶対でしたから、二町二反（約三千三百平方メートル）の土地には、大根がたくさん植えてありましたが、近所の人とみんな引き抜きました。本当に一週

間後には工事が始まりました。

当時の高射砲は性能が悪かったので、高射砲を撃つても敵機にはまったく当たらず、逆に狙われる対象になってしまいました。高射砲は八百〜千メートル上空を狙いますが、アメリカの軍艦の艦載機が低空飛行で攻撃してくるので、高射砲陣地の近くに機関砲が設置されました。高射砲への攻撃により犠牲になった人が多く、爆弾で体がバラバラに吹き飛ばされました。私の父は畑に出るたびに、バラバラになった人の骨を拾って埋めてあげていました。

日中は電気が送電されなくなり、夜は電気が外に漏れないように黒い布をかぶせていました。どんな広い家でも一軒三〇ワットが限度です。

### 徴兵

二十歳になると徴兵検査があつて、赤紙が届くと強制的に行くことになりました。兄が出征するときは町中で祝つて花輪を出して、国のために行つて来いと送られました。お金がもらえるわけではありませんか、兵隊に行つた人のいる家として名誉があると思われていました。いつ戦地に行くかわからないから、家族で面会に行つていましたが、兵隊の上下の差はひどいという話を聞きま

した。

いとこが戦死した際には町葬が行われ、英雄として、町を挙げて弔ってもらえましたが、戦争末期になるとお骨が戻らないどころか、いつどこで亡くなったかわからない人も多かったです。

### 終戦を知って

終戦の時は家にいました。ドラマで玉音放送を聞いているシーンがありますが、ラジオが家にある人はほとんどいみせんでしたから、あのようなことはありません。ラジオがあっても、電波が悪くて聞き取れませんでした。とにかく戦争が終わってほっとしました。

今の人はぜいたくです。物があふれています。思い通りにいかないから自殺するなんてもつてのほかです。戦争で亡くなった人に失礼です。命は本当に大切にしてほしいと思います。



趣味の盆栽は展示会で賞を取る腕前

## 五 私の戦争体験

中町 なかむら  
中村 ひろし  
弘

### 戦前

三鷹市で、昭和四年十月に生まれましたが、二十歳になると徴兵検査があったので、戦争に行くのを少しでも遅くするために戸籍上の生年月日は昭和五年一月となっています。

当時は、長男が後を継ぎ、次男は兵隊に行くという考え方でした。私の祖先は梅沢という徳川の家臣でしたが、父は次男だったので、兵隊に行かされないように、静岡の豪商にちなんだ中村という氏を名乗って、兵役を逃れたと聞きました。

父は国から新橋から横浜まで列車を引くようにと命じられ、日本初の鉄道事業に携わりました。それをきっかけに祖父も父も国鉄職員になりました。祖父は八王子の機関区の区長で、父は蒲田機関区に勤務時、新たに三鷹電車区を作ることになり、転勤で三鷹の官舎に来たそうです。その年に私は中村家の長男として生まれました。

第一小学校を卒業し、東京府立第二中学校（現・都立立川高校）に進学するつもりでしたが、叔父は当時朝鮮に鉄工所を持っており、跡取りがいなかったため、将来鉄工所の経営を私に任せたいと考え、私は早稲田実業中学に入学させられました。

### 中島飛行機の空襲

現在の富士重工業株式会社は、元は中島飛行機株式会社でした。現在のみやま幼稚園のところが中島飛行機武蔵製作所の正門だったのを覚えています。本社工場は今のICU（国際基督教大学）にありましたから、今でもICUの中には社長の自宅が残っています。武蔵野市からひばりが丘（現・西東京市）まで工場があつて、ひばりが丘にあるのはエンジンを作る工場でした。

中学二年か三年で最初の空襲を体験しました。B 29ではない機体だったと思いますが、空からチラシみたいなのが降ってきて、なんだろうと思って見ていたら爆弾でした。

B 29が飛んできたのは、中学三年の夏休みでした。中島飛行機を目標に向かってきました。最初に石油をばらまいて、そのあと焼夷弾を落とすので、たくさん家が焼けました。私は月島の経理学校へ行っていて、難を逃れました。最後の空襲は百メートルおきに一トン爆弾を落としながら、まっすぐ深川方面に進んでいきました。少し時間が経ってから爆発するような時限爆弾でした。

### 徴兵制度

大東亜戦争は長男であっても兵役免除にならず、強制的に戦争に行かなければなりませんでした。海軍兵学校が生徒を

五千人募集して、成績の良い順に強制的に戦争に行かされました。その五千人は人間魚雷です。私は死ぬのは嫌だと思つて、早稲田実業中学で簿記を習っていたので、海軍経理学校に志願しました。

友人の一人は、特攻隊として徴兵されたけれど、死ぬのは嫌だから敵艦には突っ込まず、海に不時着し、飛行機の翼の上に乗って海上で三日間過ごしているところを、負傷兵として駆逐艦に救出され、沖繩の病院で治療しているときに終戦を迎えたと話していました。彼は、早く東京の家に戻りたいけれど、終戦後すぐロシアが宣戦布告をしました。朝鮮半島にロシアの軍港がありました。その彼は、沖繩に2機だけ残っていた偵察機への搭乗を志願し、ロシア軍が日本に向かつていないことを確認し、代官山の大本営に報告するということで、東京に戻ってきたそうです。

## 戦後

八月十五日は夏休みで、柿を食いながら玉音放送を聴きました。負けるのは分かっていました。

終戦後、祖父も父も国鉄職員だったので、親は私を国鉄マンにしたかったようですが、私は公務員にはなりたくないと思反発して、親から勘当されました。旧制の早稲田大学文学部に入学し、映画研究部を作りました。永田町で映画の友社の社長に映画を作ってみないかと声をかけられ、「夏の風景」と

いう題材で映像を制作したところ合格し、学校を休学して助監督の仕事をしました。しかし、収入はほとんどなく、親からも勘当されていたので、食べていけません。そこで、映画の切符をガリ版で刷って新宿の映画館で売ったら、意外と儲かり、父の給料を超えるくらい儲かりました。商才はある方でした。早稲田実業中学時代の簿記の先生が早大商学部長になっており、その勧めもあって、文学部から商学部へ転部・復学しました。

大学卒業後、昭和石油に就職しました。

戦時中から終戦直後は物資が不足し、米などの食料や油などの生活必需品は国の統制下で配給制となりました。油はあらゆるところで必要とされていたので、油屋になりたいと思いました。昭和石油で経理担当をした経験や特約店とのつながりをもとに、独立して油の専門商社を設立しました。設立当初、石油を扱うような資金はないので、食用油から始めました。石油を扱うために夜学に通って応用化学も学びました。私が開発した新しい加工油剤もあります。食用油からガソリン、灯油、潤滑油までさまざまな油を取り扱っています。

その後、昭和石油の特約店になり、石油も扱うようになり、だいぶお客が増えました。

武蔵野市役所のごみ収集車のガソリンも私の会社のものを使用していました。オイルショックの統制下でも私の会社では油の供給が止まることはありませんでした。



昭和初期の横河電機の無線機



自作の絵画「高幡不動尊五重塔」

## 六 私の戦争体験

御殿山 平沼 昇  
ひらぬま のぼる

### 体が弱かった幼少期

昭和十年三月に武蔵野市で生まれました。姉一人、妹が五人います。生まれつき喉に障害があり、三歳までは上野の病院に入院していました。手術を繰り返して、人と話ができるようになったのは、中学一年になってからです。それまでは、うまく話ができなかったのも、小学校ではバカにされ、いじめられていました。入退院を繰り返していたので、小学校にもあまり通っていません。父が飼育していた鳩が常に一緒にいる大切な友達でした。

六歳のときに戦争が始まりました。食料が手に入らなくなり、弁当を持って来ない子がクラスの三分の一いました。うちは農家で食べ物には困らなかったので、先生と親から友達に弁当をやれと言われ、弁当を分けてあげたことを覚えています。

農家とはいえ、働き盛りの若い青年は全部兵隊に行き、残っているのは子どもと高齢者ばかりなので、十分な収穫はな

かったのですが、当時はどこの家も食糧不足だったので、みんなに分けていました。

### 中島飛行機武蔵製作所への空襲

昭和十九年は空襲がひどかったです。低空飛行する爆撃機や落ちてくる爆弾が間近に見えました。

私の家は八丁通りに面していました。中島飛行機武蔵製作所から井の頭公園への避難経路になっており、空襲警報が鳴ると多くの人が八丁通りを通過して逃げていました。初めのうちは、空襲警報を聞いて、中島飛行機から井の頭公園へ移動しても十分間に合っていました。そのうち、空襲警報のサイレンと同時に爆弾が落ちてくるようになり、逃げる途中で亡くなる人もいました。

また、初期の頃は飛行機の高度も高く、関前から高射砲を撃つても届かないと聞きました。逆に高いところから爆弾が投下されるので、中島飛行機以外の所にも爆弾が落ちてきました。私の家の近く（現在の中町二丁目付近）でも五名の人々が亡くなり、関前ではもっと多くの人が亡くなったと聞きました。中島飛行機の工場には大きな地下道があり、空襲の際は地下から逃げられると聞いていましたが、工場を狙った大



きな爆撃では、地下壕が直撃され、地下に逃げた三十名全員土に埋まって亡くなったと工場で働いていた人の家族から聞きました。その事実は公には発表されていません。政府はマインナスになる情報は外に出さずにいました。

## 戦後

昭和二十二年春に中学生になりました。当時は、小学校を卒業すると高等小学校（現在の第五小学校）に通いました。人数が多いので、三部制になっており、朝番、中番、遅番がありました。同年夏に第一中学校ができ、夏の炎天下にみんなで小学校から椅子をかついで歩いたのを覚えています。身体障害者手帳は先生がだめと言うのでもらえませんでした。

## 青少年の体力向上に尽力

父は兵隊に行きましたが、体が弱かったので、除隊になりました。私も生まれつき体が弱く、病院で知り合った同じく喉に障害を持った子どもたちの中には、小学生のときに亡くなる子や、希望を失って自死する子が3名もいました。戦争中の食料や医療の不足で、とくに体が丈夫でない人は亡くなるケースが多かったです。自分と同じような子どもたちが亡くなるのを見て、逆に「生きよう」と考えるようになりました。だからこそ、私の父も、戦後、青少年の体力づくりにか

を注ぎました。

子どもの体力づくりが必要と考え、平沼園卓球会館を開設しました。卓球は明治三十五（一九二二）年に、イギリスから日本へ伝わったと言われています。

## 平和を願って

井の頭公園に北村西望のアトリエがあり、長崎市にある平和像の制作の様子をよく見に行っていました。

長崎に原子爆弾が落ちた話を聞き、平和になるにはどうしたらよいかというのをいつも考えていました。荒廃した戦後の日本を立て直すためには、国民は体力をつけないといけないと考えました。戦争はだめだと言うよりも、体を動かして、いっぱい



ご飯が食べられ、健康であれば、平和に暮らせると考えました。第一によい食事をして身体を動かして自分をつくるとよいと思います。

父は戦後食べ物がなく運動もままならない時代に健康な体作らなくてはいけないと考え、木造平屋の小屋を建て、木の板で作った卓球台とラケットを地域の人々に開放しました。

父は卓球を通じて青少年育成やスポーツ推進に尽力し、平沼園卓球会館からは卓球のオリンピック選手も輩出しました。

私も父の経営を引き継ぐとともに、卓球選手としても活動し、健康を維持してきました。

一九六四年の東京オリンピックでは、父は武蔵野市役所から三鷹市まで聖火をつなぐ聖火ランナーとして参加しています。私の家では幼少期から鳩を飼育していたので、私も「平和のシンボルの鳩」を登場させる係として開会式に参加しました。当日朝六時の集合時は雨が降っていて心配しましたが、午前十時のセレモニーに合わせたように青空が広がり、平和の鳩が空に弧を描きながら飛び立ちました。無事に任務を終えた安堵と言いい知れない感動が体を駆け巡りました。

二〇二〇年の東京オリンピックは新型コロナウイルスの影響で残念ながら延期となりました。日本は世界でも身体を動かさない人が多い国です。七割の人が運動不足です。「平和を守る」というと難しく感じますが、運動で健康な体を維持し、スポーツを通して世界とつながることで、平和になると思います。



昭和 30 年頃の平沼園卓球会館

## 七 武蔵野で過ごした戦前・戦中・戦後

吉祥寺北町

ふしなわ  
藤縄

たつお  
達夫

### 生い立ち

私の生年月日は、昭和四年四月一日。昭和十二年、小学校の三年のときに吉祥寺北町に来て、現在の武蔵野市立第一小学校に通っていました。

家族構成は兄弟二人で、父、母、弟が一人です。父は軍人だったので、仕事の関係で一年間しか一緒に暮らせませんでした。

戦争から父が帰ってきたときは、中国もソ連もきていたので、国の統制がとれていませんでした。たまたま、米軍が進駐してきた方にいたので、すんなりとすぐに帰れたそうです。当時、もしソ連側にいたら、シベリアに連れて行かれたかもしれませんでした。

### 生活の変化、当時の生活

当時の生活はすべて自給自足です。一応、出征した軍人の家族でしたが、そういう恩恵は何もありませんでした。この地域は、私が来たときには、もちろん電気はありませんでしたが、ガスは百メートルくらい離れた隣までしか

通っていませんでした。周りは、全部麦畑です。今の練馬区との境まで何もありませんでした。木も植えたばかりだから何もなく、松林は風が吹けば海岸みたいに感じましたが、何ありません。さらに、今の月見小路には、道路に自動車は通行禁止という看板があつて、「なんだこの田舎は」と思いました。東京に来る前は全国を転々としていて、仙台や佐渡などにもいました。一年か二年で転々とするのはたまらないから、父親は仕事であちこちに行つても、ぼくらはここに住むといつて、そのまま北町に住んでいます。だから、周囲の変化はずつと見えてきました。南北には道路がありました。東西はあまりありませんでしたので、不便でした。皆うちに来た人は、「東京の野原の中にある一軒家だ」と、びっくりしていました。

周囲にある麦畑をやっていたのはお百姓だったので、私たちは近所に色んなものを買に行っていました。戦争中は、配給では賄えなかったもので、家で鶏も飼っていました。

### 思い出に残つてゐる事

畑の中の一軒家でしたが、環境はよかったです。なぜここを選んだかという点、吉祥寺が一番高い場所にあり、

見晴らしがよく、富士山が見えるところだったからです。親戚が本町に住んでいたの、土地を探してくれました。昭和十二年に北町に来てからは、とにかく色々ありました。ガスを自費で家まで引きましたが、お金がかかるので、止めてしまいました。その後の熱源は、全て薪と石炭で火を起しました。水道もありませんでした。家には、井戸が一本あったのですが、高台にある家で、井戸が枯れたら困るので、途中で井戸を二本にしました。井戸が一本枯れたことが一回あるのですが、十メートル掘らないと出てこなかったです。その時は、隣の家にバケツを持って飲み水を借りにいきました。今となっては、なんでも自分でできていたので、かえって良かったのかもしれないと思います。

### 戦争に向かっていく気配

昭和十六年に戦争がはじまりましたが、そこで環境がガラッと変わりました。北町にはJRの宿舎がいっぱいありますが、軍の命令で、鉄道省の練成道場ができました。これは何のために作ったかという、若い国鉄の職員が、戦争に行く前にここで訓練するためです。戦争に行く前は、関東地区の若者、水戸や群馬の方からも交代で毎日ここへ体を鍛えるために来ていました。苦勞の連

続ですね。軍の命令でだいたい二万坪が強制的に買収されました。買収金額は、当時のお金で一円と聞いていたのですが、全部国債で払われ、お金で払ってくれなかったそうです。

原っぱの中にこういうところを作ったので、周りに水を飲めるところが無かったそうです。そのため、お昼の休み時間になると、私の家に水を飲みに来ました。そうしたら井戸が一本枯れてしまったので、井戸を二本掘ることにしたのです。

### 中島飛行機への空襲

昭和十九年の空襲のときは、私は中学四年でした。当時、学徒動員のため立川飛行機で働いていました。夜勤もあり、たまたま初空襲のときは、私は夜勤明けで家にいました。そのとき初めて空鳴りというのを聞き、驚きました。これは体験した人でないと分からないと思います。爆弾が落ちてくるときに空がゴオーッと鳴るのです。警戒警報は始終鳴っていて、そのあと空襲警報が鳴ります。しかし、戦争も終わりの方になると、警戒警報よりも先に爆弾がくるのです。怖かったのは、爆弾よりも高射砲の破片でした。地面に届かずに、途中で破裂して落ちてくるのです。弾が破裂したもので、裂けた状態

で落ちてくるので怖かったです。今の成蹊のグラウンドは、高射砲の陣地だったのですが、結局B 29の高度には届かなかったそうです。その当時、成蹊は帝都防衛航空本部でした。

中島飛行機への空襲を受けたときは、夜勤明けで、家にいました。中学四年生は、学徒動員によりぜんぜん勉強しないので、とにかくよく働きました。真夜中に働いて朝帰ってくるのです。飛んでくるB 29は、富士山の方角から来るので、自宅からよく見えました。初回の空襲のときに中島飛行機がすっかりやられたので、終わってから、いったいどこに弾が落ちたのかとあちこち見に行きました。流れ弾がけっこうあったようで、あちこちに不発弾が落ちていて、穴が開いていました。現在の成蹊大学の裏の、五日市街道の角には、一トン爆弾が落ち、大きな穴が開いていました。戦争で小中学生は、学徒動員に行ったり、少年航空兵や士官学校など、いろんなところへ一人ずつ送られますが、幸いなことに、戦争で亡くなった方は知っている限り一人もいなかったです。中学の同級生は二百五十人いましたが、二人だけ自分の家が焼夷弾にやられてしまいました。誰一人亡くなった人はおりませんでした。

## 立川飛行機

立川飛行機では、「飛行機を作れ。」と命じられました。一か月間は実習場で実習し、それから、各工場に配属されます。立川飛行機は輸送機と戦闘機のはやぶさを毎日作っていました。それ以外には、試作機で随分いろんなものを作っていました。飛行場の側に工場があったので、できあがった飛行機はそこから試験飛行へ飛び立ちます。私は飛行機が好きだったので、よく昼休みに飛行場に行って、飛び立つ飛行機を眺めていました。当時は毎日十機作っていたのですが、私は、最初は輸送機の尾翼から胴体を組み立てていました。私は飛行機が好きだから一生懸命やりましたが、中には「俺たちは学生なんだ。職工さんじゃないんだ」と言い出す人もいました。当時の学生は、現場の係長である指導官から言われたことをやるだけでしたが、皆まとまっていきました。当時は、家にもいても恐いし、職場にも恐いし、いるところがないかったです。職場にいるときに、グラマンが来たというところで空襲警報が鳴ると、工場のある立川から国立の駅の手前の山まで、駆け足で避難します。その後は、工場に戻るわけではなく、「家に帰れ」と言われます。いよいよ空襲が激しくなってくると、避難途中でやられていく人も見ました。爆弾でやられるのが一番気の毒です

ね。爆弾は爆風があるから、土けむりがあがって、真っ黒になってしまい、見られたものではありません。家にも立川の山奥にいても破片が降って来ます。そのうち立川飛行機が八王子に工場疎開をはじめました。それからは楽でした。八王子は、昔は機織りが多かったのですが、そういう工場がみんな休みになって、全部軍需工場に借り上げられて、部品倉庫になったりしました。

### 終戦の気配と戦後

立川での空襲の後、これはもたないな、と思いました。国は被害が軽微であると言っていました、そうでないことは皆分かっていました。

終戦のときは自宅にいて、ラジオを聞いていました。停電じゃなかったのでしょうか、電気のいらぬ鉦石ラジオで聞いていました。その日は空襲が無かったので、放送がある前から、これはおかしいな、と分かっています。その日は朝から静かでした。終戦の前夜に空襲を受けた小田原は、最後に終戦の日の朝にも空襲を受けたのではないかと思えます。玉音放送の後、さてこれからどうしようと考えました。戦争が終わって、放り出されたようなものです。物が何もないのです。配給がどんどん来なくなってしまうので、それからの生活は厳しか

ったです。終戦後の闇市の名残が今のハモニカ横丁です。何年か前まで、その当時の看板がありました、いつの間にか無くなっていました。当時の人はもう誰もいないと思います。

戦後は統制がありませんでした。何でもやりたい放題なのです。闇市で儲けてお金持ちになった人もいました。終戦のときは、中学四年生だったので、その後落ち着いてからまた学校に行って、旧制の工業専門学校に入りました。今の工業大学です。それからは、大変でしたが、働きながら大学に通いました。英語の通訳をやっていたのですが、幸せなことに、仕事に自由がきいたので、例えば、夏休みや試験があるときは一か月休んだり、他にも職員が何人かいたから、交代で休んだりしていました。

鉄道は、全部GHQの指示でやっていたので、鉄道司令部が監視することになり、私はそこでGHQの職員として働きました。鉄道は、当時は二十四時間運転だったので、仕事は朝から晩までやっていました。私は工科系の学生だったので、品川で車両の検査などをやる過程で、通訳として勤めました。

英語は独学で勉強しました。母親の仕事の影響で、外国人と付き合うのに抵抗がなかったのです。母親は五年

間、女子師範学校という、今の教育大学で英語の教師をしていました。だから、私は英語を何も話せない頃から外国人の家に連れていかれて、その家の子どもと遊んでいました。その子どもも日本語は話せないし、私も英語が話せない状況で放り出されるので、分からないところに入っていくのは自然と抵抗が無くなっていきました。

母親からは英語は教わりませんでした。その代り、分からないことがあると「なんて言っているのか分からないんだけど」と、家に帰って母親に聞くことはありませんでした。そういう後ろ盾があったから、仕事で何にも分からないところに飛び込んでもやっていけました。私は非常に周りに恵まれていました。当時、品川に一年間いたのですが、一週間以上仕事を休んだ後、職場に行ったら「あんた今日から転勤だ」と言われ、「いよいよクビか」と思ったら、東京駅に転勤だったのです。びっくりしました。なんであまり仕事をしていなかった人間が東京駅みたいなところに行かされるんだろうと思いました。でも、それが私にとってプラスでした。今でも東京駅は日本の中心ですが、当時はなおさら他の駅と雰囲気全然違いました。東京駅ではインフォメーションで勤めています。外国人がまず一番にやって来るところなので、それだけの苦勞をしましたが、あそこにいたときは本当

に勉強になりました。一番よかったのは、外国へ行かずにあらゆる国の人と付き合えたことです。こんなに恵まれたことはなかったと思います。東京駅には世界各国からあらゆる人が来ていました。だからすべて経験や体験で学び、そこでまた鍛えられました。英語も国によって発音がちがいます。最初はイギリス圏から来た人の言葉が分からなかったです。その後鍛えられて、もう一回聞いただけでわかるようになりました。世界各国の人が来るので、困ったこともありました。トルコの人 came ときだけは、お互いに何にも通じなくて苦勞しました。その時は結果的にそれで終わってしまいました。東京駅には、講和条約が締結され移管された昭和二十七年までいました。

### 若い世代に伝えたいこと

戦争は体験しないと分からないです。口では言いにくいのですが、まず戦争の怖さがあります。家にいても、職場にいてもだめで、いる場所がありませんでした。私は、空襲を實際体験するような苦勞をしてきたから、今は怖さがなく、どんなことでも耐えられると思えます。嫌な体験ですが、そのときの体験があるから、今があるのだと思います。戦争は、こんなにみじめなことではない

です。いろんな現場を目の当たりにしたら、誰でも目をそむけます。焼夷弾を浴びて真っ黒になった人を誰かが洗うのです。ただ一言で言えるところと、ああいう時代は二度と来ないことを祈ります。

## 八 武蔵野での戦争体験

桜堤

山やまなか中

富とみえ枝

### 生い立ち

私は大正十五年八月三十日生まれで、現在九十七歳です。戦前は京橋区（現・中央区）の永代橋の近くに住んでいました。父が高級料理店で働いていたのですが、贅沢は敵だということで、店を閉めてしまいました。その後、縁があつて中島飛行機の食堂で勤めることになり、伏見にあつた中島飛行機の社宅に住むことになりました。

### 武蔵野への初空襲

武蔵野へ初めての空襲があつた昭和十九年十一月二十四日は、中島飛行機の新入社員の試験日でした。私は当時十八歳で、タイピストとして働いていたのですが、その入社試験を受けるため、午前中に工場へ行きました。近くに病院があり、身体検査と試験をした後、午後から口頭試験という面接の予定で、それまで休憩となりました。受験者は待合室で待つことになっていましたが、私は家が近かったので、一旦帰宅しました。その日は父がたまたま非番だったので、昼食に炒飯を作ってもらいま

した。当時、お昼になると必ず「ボー、ボー」という警戒警報が鳴っていました。偵察機が来ていたのです。そして敵機がさらに近づく、「ボ、ボ、ボ」という空襲警報が鳴ります。その日も、警戒警報があるからと、父から早く食べてしまうように言われ、皿を受け取ろうとしたその時に、空襲が始まりました。稲光のようにピカピカと周囲が光って、ガタガタガタともものすごい音を聞きました。大きな揺れで、畳に伏せると、上からガラガラといういろいろなものが落ちてきました。空襲警報が鳴らないうちに敵機が上空に飛来し、爆弾が落ちていました。中島飛行機に落とすはずの爆弾がそれて、住宅地に落ちてしまったのです。すごい土煙で真っ暗になってしまいました。早く防空壕に入ろうということで、母が私や弟妹たちを連れて、荷物を持ち防空壕へ入りました。この防空壕は、近所のたくさんの方が手伝い、何か月もかけて作った、深さが一丈三尺の、十文字状のトンネルを掘ったもので、かなり大きなものでした。その防空壕が潰れてしまったら助からないのですから、今思えばバカみたいだと思いますが、当時は中に入って安心していました。近くのガスタンクを狙った爆弾が落とされたのですが、もしタンクに直撃していたら、大変なことになっていたでしょう。防空壕には、近くにあつた朝比奈鉄工

所の工員たちが逃げ込んできました。工員の方たちは、爆風で真っ黒な顔中に、いろんな破片が刺さっていました。鉄工所の仕上げを行う棟に爆弾が直撃したらしく「米軍はよく知ってるな」と話していました。兵隊たちが出張っているんなことをやってくれましたが「防空壕の上はひどくて見られない。戦場よりひどい」と言われ、その日は、防空壕の中で夜を過ごしました。

翌日、外へ出てみたら、私の家を挟んで一列ずつくらの間隔で爆撃の被害を受け、まともな家は一軒もありませんでした。当時、周辺には150軒の住宅があったのですが、そこへ三十三発の二五〇キロ爆弾が落とされました。周囲は全滅に近かったと思います。我が家のはす向かいの家が爆弾の直撃を受けていて、全部飛んでしまっていました。幸い、奥さんが子どもたちを連れて埼玉へ疎開していて、旦那さんは会社に出勤していて留守だったので、無事でした。一方、別の家族は、庭に防空壕を掘っていたので、空襲時にその中に入り、お姉さんが畳でふたをしようとしたときに、そこに爆弾が落ち、防空壕の中に入っていた家族は、粉々になってしまいました。お姉さんは、畳ごとひっくり返って爆風を免れ、一人だけ助かりました。また、私の五歳の弟が、お友達と我家で遊んでいて、お昼になったからといって帰ったのです

が、その途中で空襲にあい、爆風のせいで亡くなってしまいました。怖いというのを通り越してしまった心境でした。

### 東京大空襲

空襲後、伏見の家には住めなくなり、親戚の家を頼って、千葉の市川で厄介になりました。その後、親戚から小岩の家が空いているから、住んでよいと言われ、そちらに住むことになりました。しかし、その家で今度は昭和二十年三月十日の東京大空襲にあってしまいました。その日、空襲警報が鳴ったのでみんな逃げろと、母と弟妹は江戸川の土手のほうへ向かいましたが、私と姉は家を守らなければということで残りました。当時は、どこの家でも、玄関の前に防火用水という水槽のようなものを置いていて、火災が起きたらその水を使って火を消すように言われていました。今考えたらバカバカしく、そんなことをするなら逃げた方がいいとは思いますが、その時の私と姉は、火事になったら消し止めるため、火ばたきを持ってそこへ立っていました。

敵機が来ると、サーチライトで飛行機がきれいに見え、その周りに、小さくぐるぐる回っていたのが日本の戦闘機で、機銃掃射の赤い火花がよく見えました。

そのうち、日本の戦闘機が撃たれて墜落してしまい、その様子を見て、日本は危ないな、と思いました。地上からも高射砲を撃っていました。全然高度が足りておらず、その破裂した破片が下へ落ちてきて、とても怖かったです。照明弾が使われると、昼間のように明るくなり、敵機はそこに焼夷弾を落とすようになっていきます。油性焼夷弾はヒューという音を立てて落ちてきて途中で破裂し、そこからパラパラと火花のようにきれいに落ちてきます。あれでは止めようがありません。下町は見渡す限り火の海で、その中をたくさんの人が逃げてきました。小岩までは燃えなかったのですが、千葉県の方に逃げて行く人は我家の近くを通っていきます。ゲタが燃えてしまい、はだしの人や、背負った赤ちゃんが死んでしまっているのにも気づかず、自分のことで必死な人、お鍋のフタなど、どうでもいいものを持って逃げてくる人などを見ました。ガソリンスタンドに医師や看護師が詰めて、来る人の手当てをしていました。熱いからと言って川の方に逃げた人は、どんどん押されてしまい、溺れて死んでしまった人もいました。ラジオでは「我が方の損害軽微」としか伝えなかったのですが、言葉に表せないくらい悲惨な状況でした。あんな思いは二度とするものではありません。

### 武蔵野での再度の空襲

その後、空襲の脅威から逃れるため、家族でリアカーを使って荷物を運び、桜堤にあった中島飛行機の社宅に移りました。すると、今度は機銃掃射による攻撃を受けてしまいました。警戒警報、空襲警報になると、皆家の中に入って静かにしているのですが、近所に住んでいたおばあさんが、外で動き回っていたのです。上空からは二軒長屋だったところが住宅ではなく会社の寮とか工場が並んでいるように見えたようです。そこを走っていたおばあさんを狙って、機銃掃射がありました。おばあさんは無事でしたが、弾が家を貫通するくらい大変な威力でした。

また、終戦直前には食べ物が多かったため、八百屋のおじさんと所沢まで、自転車でかぼちゃを買いに行ったことがありました。その途中、飛行場のわきを抜けようとしたところで、また空襲に遭ってしまったのです。森の中へ隠れて、空襲の終わるのを待っていました。とても怖かったです

### 終戦前後の生活

終戦直前のころには、ネックレスから指輪、お釜でもフライパンでも金属はすべて供出で取り上げられてしま

いました。戦争に負けるとは思っていませんでしたが、万一、そんなことを口に出し、憲兵隊に知られたら大変です。憲兵隊は一番怖かったです。

終戦を迎えた後、桜堤の子どもたちは、境の小学校まで通わなければならず、小学校の創設を要望したのですが、近くにできたのは中学校でした。それでも下の階を使って小学校の授業ができるようになったのですが、私の子どもは戦後いちばん人数の多いときに生まれ、一クラスに七十二人もいました。

配給は、境の駅の方まで歩いて行っていました。配給されるのは玄米だったので、精米するのにその米を運び、当時は、本当によく歩いていたと思います。周辺は麦畑で、道路は舗装されていなかったのですが、風が吹くと砂が舞ってしまつて大変でした。また、雨が降れば道はドロドロだし、砂利道も大変でした。

### これからの世代に伝えたいメッセージ

戦争は絶対にしてはいけません。また、若い人達にはあいさつや言葉遣いに気をつけ、目上の人に敬意を払ってほしいと思います。基本を身につけ、ありがとうございます、という感謝の気持ちを伝えられる人になってほしいです。戦争がいちばんいけません。戦争、争いごと

のおこらないようにということを切に願っています。



第二部 市民の心に残る戦争体験



## 九 浜松市での空襲と疎開

桜堤 おかもと 岡本 とくこ 徳子

### 生い立ち

私は静岡県の浜松で生まれ育ちました。父は昭和十八年に他界、五人いたうちの三番目の兄が海の事故で私を助けて亡くなり、空襲が始まった時は、母、四人の兄、私の六人家族でした。

私が国民学校（小学校）四年生のときに太平洋戦争が始まりました。国民学校卒業後は、浜松市立高等女学校に入学しました。

長兄は陸軍の軍人で、中支に出征していました。マメな人だったので、戦地からよく手紙を送ってくれました。やがて、封書を送ることができなくなり、ハガキが送られてくるようになりました。亡くなった兄の追悼文もハガキに番号をつけて送ってきていましたが、空襲ですべて焼けてしまいました。

二番目の兄と四番目の兄は兵役に、五番目の兄は軍属でした。四番目の兄は、家族の知らない間に特攻隊に志願していました。母は、兄たちの無事を祈って千人針を用意し、街頭で通行人に協力してもらったこと

もありました。私の国民学校の先生が、長兄が戦地にいることを知っていたので、慰問袋を送ってくれたこともありました。戦争中は学徒動員があり、中学生も女学生も軍需工場で働きました。愛知県の豊橋に行っていた上級生の中には、戦災で犠牲になった人がいました。私達下級生は、近隣の出征兵士の留守宅の農家に、勤労奉仕に行きました。

長兄は歩兵でしたが、航空士官学校に進んだ親しい友人が浜松の飛行学校に赴任してきて、私の家でお世話することになりました。その後、その方の後輩もお世話しました。母は自分の息子の代わりと思っていたのだと思います。今の大学生くらいの青年たち、お世話した方のほとんどが南の空に散りました。

母のいとこたちが東京から浜松に疎開してきました。私の家は男性が多かったので、いとこの中に年下の女の子もいて、うれしかったです。同じ女学校にも通いました。一年間ほど一緒に暮らして、空き家が見つかり移っていきました。

### 浜松への空襲

浜松では、昭和二十年、私が女学校二年生のころから空襲がひどくなってきました。浜松には飛行場や高

射砲等の軍の施設、そして軍需工場もたくさんあったので、昼夜を問わず敵機が襲来しました。

「ウー」という長いサイレンは警戒警報、要注意。「ウー・ウー」と高低のある空襲警報は、敵機が近づいている知らせ。こわかったものです。

昭和二十年四月三十日の昼間に大きな空襲がありました。明らかに浜松を目標としていました。警戒警報が発令されると、学校に近い生徒は帰宅します。私の家は学校の近くにあつたので、急ぎ帰りました。ラジオが「敵B 29の編隊が御前崎南方洋上を北上中」と告げるときは浜松が目標となっていたそうです。

空襲警報のサイレンのあとでB 29の攻撃が始まり、母と私は家の防空壕の中で抱きあっていました。この四月三十日の空襲は爆弾攻撃でした。爆弾攻撃が終わり、防空壕から出た私が目にしたのは玄関の軒先に斜面につきささり、浮いている状態の大木でした。

一軒おいてお隣のお宅が爆弾の直撃をうけて破壊され、そのお宅の棟木がとばされてきたのです。私の家は高台にあり、東側の森と、北側の坂に爆弾が落ちました。私たちはその間にいたわけですが、よく無事だったと思います。

浜松の町並が破壊されあちこちで火災がおきました。

友人のご家族は防空壕が直撃を受け、友人以外全員亡くなりました。小学校の校長先生も疎開してきたクラスの子達もその他多くの方が犠牲になりました。

私の家は地震のあとのように、木の骨組みは残っていましたが、爆風で穴だらけの状態でした。家は高台にあつたので、このときは火災を免れました。ご近所で疎開した方もありましたが、お互いの状況を把握していた人は少なかつたと思います。

長兄は中支から南方に派遣されていましたが、戦争が激しくなる前に内地に戻り、甲府におりました。四月の空襲のあと、母と私は甲府の兄のところにご相談に参りました。その留守中、六月十八日の夜に浜松に空襲があり、家が焼けてしまいました。家では猫を飼っていましたが、家に自由に入りにできるようになっており、私たちは甲府に行くすぐ戻るつもりでしたので、一日、二日は大丈夫と思っていました。留守中の空襲で亡くなりました。

### 疎開

家が空襲で焼けてしまったため、甲府で暮らすことになりました。甲府では、七月七日の夜に空襲がありました。川の堤防と田んぼの中を、めらめらと落ちて

くる焼夷弾を避けながら逃げたのを覚えています。

身を寄せていたところは、かろうじて焼けずに済みました。食料のない時代でしたが、ご近所の倉が焼け残り、鮭の缶詰と砂糖をもらいました。この時のことを思い出してしまうので、今でも鮭の缶詰は苦手です。

## 終戦

八月十五日の終戦は、甲府で迎えました。夏休みだったので、学校ではなく家にいました。玉音放送はよく聞こえませんでした。長兄が日本は負けたのだと言って、戦争の終結を知りました。戦時中、男性は徴兵検査を受け、健康な者は兵役につきました。国を守るため、家族を守るため、多くの兵士が戦場に向かい、多大な犠牲者が出ました。

私たち家族は、長兄の仕事で甲府から静岡に移りました。その頃、二番目の兄と五番目の兄が復員してきました。静岡も空襲を受け住宅事情は悪く、兄の勤務先のある東海道線の蒲原（岩淵駅、現在は富士川駅）に転居しました。

食料事情は悪く、会社が社員に貸していた土地を耕し、兄たちはほとんどの野菜、陸稲までつくりました。私は食べさせてもらう立場でしたが、母や兄たちの苦

労がしのべれます。母と兄たちは買い出し列車で農家へ買い出しに行きました。食糧と交換する着物は戦災で焼けてしまい、塩を持っていったのを覚えています。お米を分けてもらえることは少なく、おいもを分けてもらうことが多かったと思います。

私の学校生活は、思えば四月三十日の空襲から、一日も学校に行きませんでした。甲府の学校に転校する予定でしたが、浜松から直接静岡県立高等学校に転校しました。蒲原の自宅から学校までの通学時間は学校中で一番長かったと思います。家から岩淵駅まで三十分、汽車で静岡まで五十分、静岡駅から学校まで四十分かかりました。冬場は母が毎日、家から岩淵駅まで送迎してくれました。国道一号線を歩くのですが、当時はバスがなかったのです。学友はクラブ活動をしていましたが、私は家が遠いのでクラブ活動はできませんでした。

終戦後、学制が変更になり、旧制か新制かを選ぶことができました。私は新制を選び、高校三年生で卒業しました。

そのころ、四番目の兄が復員してきました。浜松に帰って焼け跡に立ち、菩提寺のご住職にうかがって、私たちのところに帰ってきました。兄は特攻隊を志願

していました。終戦も間近のころ、出撃したのですが、悪天候のため中止となり生還しました。本人の思いはどうであつたかわかりませんが、家族としてはありがたいことと思いました。

### 今思うこと

経験していないことは、いくら伝えられても忘れてしまうと思います。豊かにはなりませんが、世の中が変わってきて、良いものを失ってしまったと感じていきます。戦争の悲惨さを語り継いでいかないとはいけません。今の平和がありがたいということを忘れてほしくありません。戦争を経験した人が、平和の大切さを訴えていかなければなりません。同じ地球に暮らしているのだから、仲良くしなければならぬのに、できないのが残念でなりません。

戦争は人がいるから始まるのです。自分の国の利益のために戦争を始めます。戦争をなくすためには、世界中の政治に携わる者が、その責任において絶対に戦争をしないことが大切です。誰もが自由に発言でき

る社会でなくてはなりません。国のトップを選ぶのは選挙しかありません。選挙は一般市民の数少ない意思表示の場です。

### 子どもたちや若い人たちに伝えたいこと

平和の尊さを、戦争のおそろしさを、おろかさを小さい頃から学ぶべきだと思います。楽しい世の中が続けばいいですが、なかなかそうはいきません。みんなが幸せになれる世の中は、平和を求める思いがないと困難です。それは、学校教育にもかかっています。

若い人たちには、機会を生かしてほしいと思います。戦争は怖いということを知って大人になってほしい。好きなことができるのは平和だからだということを感じてほしいです。一人ひとりがどうやって生きていくのか考えて、命を大切に、世界中の人たちが仲良くできるといいと思います。

## 十 私の戦争体験

関前 加藤 昭二

### 戦前

私は昭和六年に駒込で生まれました。兄と二人の姉、妹がいました。

父は、芸者用の三味線やバチを作っていました。中国では犬や猫の肉を食べるため、不要になった皮が日本で三味線に使われています。象牙も材料として使っていました。戦争で船での輸送ができなくなり、材料が手に入らなくなりました。

### 戦中

戦争が激化してきて、妹は学童疎開に行きました。兄は徴兵される年齢になっていましたが、こんな戦争は絶対には負けると言って、徴兵から逃れるため、新潟（石川？）の七尾電機という軍需工場に働きに行きました。軍需工場で働くとは出征が延期されるからです。

私は小学校は四年生までしか通っていません。昭和十六年くらいからは学校には配給のコッペパンをもらいに行くくらいでした。

自宅は六義園の少し先の理化学研究所の近くにありました。理化学研究所はドイツから原爆の材料を運んでいするなどと言われ、アメリカから標的にされ、研究所周辺にある自宅も学校も空襲で焼けてしまいました。

戦後、空襲で学校が焼けたことを説明すれば、小学校を卒業しなくても旧制中学に入ることはできましたが、私はしませんでした。

最初に空襲があったのは昭和十九年十二月十二日だったと記憶しています。その時はそれほど大きな被害はありませんでした。昭和二十年三月十日の東京大空襲の時も、駒込は山の手なので、直接の被害はなく、「下町の方は大変だったみたいだね」と話していました。

昭和二十年四月十三日の夜、空襲警報が鳴り、近所の人たちは皆先に避難しましたが、父や姉は荷物を持って逃げると言って、布団やら何やらいろいろ風呂敷に包んでいて、少し避難が遅れました。都電の線路沿いに駒込駅方面に向かって四人で逃げる途中、敵機の隊列が見えたので、姉に「早く逃げよう」と声をかけたその時、ヒューンという音がして爆弾が左足の太ももに当たりました。私は爆弾が当たった瞬間から三日間は意識がなかったもので、その間の記憶はありません。後から聞いた話

では、駒込病院に運ばれ、医者からは三日生きられれば良いが、無理かもしれないと言われたそうです。油脂爆弾という焼夷弾で肉が焼け、油脂のついた部分を看護師が切り取りました。子供の頭くらいの大きさの肉を切っても血管ごと焼けたか取れたか、血が出なかったそうです。傷口にも油脂がベタツとカサブタのように固まっています。傷口にも油脂がベタツとカサブタのように固まっています。傷口にも油脂がベタツとカサブタのように固まっています。傷口にも油脂がベタツとカサブタのように固まっています。治療は傷口に赤チンを塗るくらいの簡単な治療しかできませんでした。

姉も地面に落ちた爆弾の破片が腕に当たり負傷しました。姉は腕を手術しましたが、今のような医療体制ではないので、腕に鉄の棒を入れました。その棒が体内でサビてしまい、鉄サビが原因で手術から半年後、姉は亡くなりました。手術をしなかったら生きられたかもしれないと残念に思います。

四月十三日の空襲で家は焼けてなくなりました。私と次女が駒込病院に入院していたので、父と長女も付き添いとして一緒に病院で寝泊まりし、家族四人分の食事を病院が用意してくれました。看護師さんが特別にやりくりしてくれていたのだと思います。しかし、終戦になり政府が変わったので、戦後は食事を出してもらえなくな

りました。親類を頼っていきました。戦後の方が生活は大変でした。

私の左足のけがは、何度も右足の皮膚をはがして移植する手術を繰り返し、今では生活に支障ないほどになりましたが、ケガの痕は残っています。

## 戦後

父は戦争で三味線作りの仕事ができなくなってしまったので、私はきくやという邦楽器店に奉公に行きました。

二十歳まで奉公したらその店の看板が出せると言われていました。自分の店を持つようになって、はじめは三味線の材料がなかなか手に入らず、生活は楽ではありませんでした。朝鮮動乱の頃（一九五〇年頃）からインド製の材料が輸入ができるようになり、生計が立てられるようになりました。



# 十一 恐ろしかった五歳の夏

## 〜広島での被爆体験〜

吉祥寺本町

木岡きおか

紀久代きくよ

八月十五日

一九四五年、広島に原爆が落とされたその朝、私は爆心地から二・三キロメートルにある皆実町の自宅におりました。このとき私は五歳でした。

「あの日」父は兵器をつくる会社に、母は近所の銀行に、十三歳の姉は勤労奉仕に出かけていました。祖母は三歳の妹をおんぶして、家の掃除を、五歳の私と十歳の兄は玄関で遊んでいました。

ピカッ！ ドーン！

突然に、生まれて初めて聞いて、大きな音がしました。私は、雷が落ちたと思いました。

「お兄ちゃん！おそろしいよ」と私はしがみつきました。兄は「何事が起きたんじゃないのう。見てくるけん、そこにじつとしとけん」と言いましたが、怖かった私は兄にしがみついたまま、一緒についていきました。外に出てビックリ。ヤカン、なべ、靴、下駄、バケツ。いろ

いろなものが飛んでいました。家の中に入って、またビックリ。祖母と妹が柱の下敷きになっていました。妹は顔中血だらけで泣いていて、祖母は「助けて」と叫んでいました。不思議なことに私と兄はヤケドもケガもしていませんでしたので、なんとか祖母と妹を助け出し、四人で近所の防空壕に避難しました。

防空壕に入ると中は人がいっぱいでした。ヤケドをしている人、ケガをしている人、みんなボロボロになって、死に物狂いで、泣きながら家族を探していました。

ヤケドを受けた人は、皮膚がズルリとむけて、その皮膚を垂れ下げながら座り込んでいました。

それからだいぶ経って母が戻りました。母の顔はヤケドで二倍くらいにふくれていて、腫れた瞼で目が見えないほどでした。首や腕など衣服から外に出ているところは皮膚が垂れ下がってオバケみたいになっていたので、名前を呼ばれるまで母だと気づきませんでした。すごく



祖母と妹は自宅の下敷きに：被爆者の描いた絵から

被爆者の描いた絵より

痛そうで、かわいそうでした。

叔母の家に行くと、まだ一歳だった従弟が畳を五枚くらい重ねた上に寝かされていました。もう、冷たくなっていました。叔母も大変なヤケドで、うずくまって、痛がっていました。母が大河（現在の広島市南区）の山中に逃げようと言いましたが、叔母は叔父を待つと言って動きませんでした。

母と私たちは、蓮の葉を日傘代わりにして歩きました。大河の山の入口も人、人でぎっしりでした。

子どもの名前を呼んでいる人、苦しんで息絶え絶えになっている人、とにかく死にそうな人ばかり。たいへんな有様でした。母は大ヤケドをしているのに、私と妹をしつかりと抱きかかえてくれました。

夜遅くなつて、父が私たちの名前を呼びながら、探しに来てくれました。道はたくさん死体で埋め尽くされているので、死体を避けながら歩くのに時間がかかったとのことでした。父がおにぎりを三十個くらい持ってきてくれましたが、前、後ろ、あらゆる場所から手が出てきました。自分がおにぎりを食べたかは覚えていませんが、父と母が私や子どもたちに食べさせようと隠すようにしていたことを覚えています。

はっきり覚えているのは、山の上から見た広島市内の

光景です。真っ黒な中に、大きな赤い炎がゆらめいて、時々、ドーン、ドーンという爆発音が聞こえました。いつまでも、いつまでも、火は燃え続けていました。幼かった私は、原爆が落とされた時のことは詳しく覚えていませんが、あの不気味な光景だけは今も目に焼き付いています。

### 原爆投下直後の広島

翌朝、広島市北部の緑井の親戚の家に避難することになりました。避難先の大河地区から緑井までは、広島を南から北に縦断することになり、途中三つの川を渡ります。父が大八車の前を引き、十歳の兄が後ろから押して移動しました。自分の子どもと間違え、兄に抱き着いてくる人や、助けてくれとしがみついてくる人がたくさんいて、兄は泣きながら大八車を押していました。

途中の川には、ヤケドをした人たちが水を求めて川に入って亡くなっていました。大人も子どもも赤ちゃんもみんな裸で、キューピー人形のようにパンパンに膨らんでいました。広島川は海に近いので、潮の満ち引きに合わせて水位が変わります。その人たちが、潮の満ち引きによって、右に左に、ゆらゆらと流されていた光景は、とても現実のものとは思えない、むごい光景でした。

緑井の親戚は外科医でしたが、そこにも大ケガや大ヤケドをした人が沢山逃げてきていたので、母はなかなか治療してもらえませんでした。そこで、姉と兄が近所の畑から毎日キュウリをもらってきて、皮膚にキュウリを張り替えてあげていました。母は包帯を巻いて目・口・鼻しか出ていないミイラのような状態だったので、怖かったです。母のヤケドは長く膿を持っていて、ようやく落ち着いたのは年末でした。

その頃、家族みんなが住めるバラックを建てて生活できるようになりました。幸い、私の家族は全員無事でしたが、亡くなった人がたくさんいるのでそんなことは言えません。家族がみんな亡くなって教会に預けられた子もいました。

でも、私が「被爆者」だと深刻に感じたのは大学生の時でした。

### 差別を受けた過去

念願の東京の大学に合格し、希望に胸を膨らませて学生寮へ入りました。入学から十日くらいたった頃、新生の自己紹介をする機会があり、「出身地は広島です」と言うと、先輩から「あなたは、原爆を受けているの？」と聞かれました。「はい、五歳のときに」と言っ

たとたん、一瞬シーンとして、周りがザワザワしてきました。その後、学生寮で友だちになった人から「広島の子の使った食器を使うと原爆の毒がうつる」などと言われていることを聞きました。ショックでした。私は学生寮の人から外れて、たった一人で食事をするようになりました。

その後、広島へ戻り結婚しました。当時、被爆者から産まれる子どもには原爆の影響があるかもしれないと言われていました。子どもの体調が悪いと、親が原爆を受けたせいだとか、弱い子を産んだと言われるので、みんな原爆を受けたことを隠していました。

自分の子どもにも、私が被爆したことは長らく伝えずにいきました。自分の子どもが差別を受けないためにも、広島出身とは伝えても、被爆二世であることは周囲に知られてはいけな思っていました。

### 平和な世界にするために

差別は人間を変えてしまいます。お互いにコミュニケーションを取り合い、理解し合い、思いやりを持つことが「差別」を無くすことだと思います。

このような差別を受ける人が二度と現れないように、約二十年前から、小・中・高等学校など様々な場所で、

広島での体験について伝える活動を続けています。撮ったビデオを貸し出したり、冊子を作成したりもしています。語る人がだんだん少なくなっているのですが、今後も原爆について伝え続けられるように、被爆二世の方々との勉強会をして語り部の育成の活動もしています。

また、被爆者本人だけでなく、被爆二世への医療費助成を東京都に要請する活動も行っています。

核兵器を廃絶し、平和な世界にするために、私は被爆者の願いを世界中の人たちに語り続けたいと思います。



## 十二 私戦争体験

境南町

猿渡さるわたり

松子まつこ

私は、昭和五年三月生まれで、八十六歳（平成二十八年寄稿）です。東京下町、深川で幼少期を過ごし、十四歳のときにあの三月十日の東京大空襲を体験しました。

弥生三月の時期になると毎年のように、報道や新聞等で空襲の記事を目のあたりにしますが、この度、武蔵野市民の方をはじめ、多くの方々に七十年以上前のいたましい経験をお伝えしようと思い、ペンをとりました。

まず、私が生まれ育った当時の深川界隈を紹介したいと思います。

生まれは、東京府東京市深川区元加賀町（現・江東区三好四丁目）で、江戸風情がいっぱい残る人情味のある下町情緒があふれていました。自宅の周りには、富岡八幡宮、深川不動尊、寛政の改革で有名な老中松平定信公のねむる霊岸寺をはじめ、紀伊国屋文左衛門が建てたと言われる名園、清澄庭園、また大木を浮かべた木場貯木場などがあり、環境の良さがなつかしく思い出されます。一方、我が家は、当時酒屋を営んでおり、父親が福島県会津田島出身のため、屋号を「会津屋」といいました。

家族は、両親ときょうだい五人（姉一人、妹二人、弟一人、私は次女にあたります。）で、私たちは我が家から二百メートルほどの距離にある、元加賀国民学校に、仲良く通い、昼休み時間には、毎日自宅まで、お昼御飯を食べに帰る日々を送っていました。

また、近所の仲良しグループで、一日かけて徒歩で、葛西橋方面にアサリやシジミ獲りに出かけ、また、その途中にあった国鉄貨物駅・小名木川駅近くには、牛舎があり、牧場に立ち寄ったことなど懐かしく思い出されます。

しかし、私たち家族には、不幸な出来事が起こってしまいました。

### 開戦

私が十一歳の時（昭和十六年）のことです。

母が当時の流行り病である「パラチフス（腸チフス）」を患い、特効薬の入手も困難な時代背景もあり、治療の甲斐無く、三十六歳という若さで父親と私たち五人を残し、天国へと旅立ってしまいました。

そして、その悲しみも癒えないまま、その時が来てしまいました。

昭和十六年十二月、大東亜戦争（太平洋戦争）の開戦

(真珠湾攻撃)です。開戦間もない頃によく耳にしていたのは、「日本は神の国」「我が日本軍の連戦連勝!!」という景気の良い言葉ばかりでしたが、時が経つにつれ、大変恐れていた「警戒警報」や「空襲警報」が頻繁に発令されるようになりました。夜間の場合には、家中の電気を一斉に消灯して待機を重ね、さらに、深刻なときには、縁の下にある家族数人が入れるだけの、わずかな空間に避難することもありました。この待機も、戦争が激しくなってくるにつれ頻度が増し、身の安全が確認される次第、ただちに解除されていたので、ある意味、「生活の一部」のような感覚になっていた記憶もあります。

この様な中、当時の世相として、幼い子どもや学童たちには、「集団疎開や縁故疎開」といった対策もとられはじめました。私の幼い弟も、縁故疎開で栃木県の喜連川(現・栃木県さくら市)の母方の親戚宅で一時期を過ごしていました。

## 東京大空襲

東京大空襲のあった三月初旬は、皮肉にも桃の節句や学校等の卒業式の時期に重なり、全国の疎開先から多くの学童たちが家に戻ってきていました。その最中にあの悲劇が起こり、多くの尊い生命が奪われる形になってし

まいりました。

このような背景のもと、三月九日の夜、あとわずかで三月十日になる午後十一時三十分過ぎのことです。いつもならば、敵機が飛来すれば、まず「警戒警報」が発令されるところですが、この時は、いきなり「空襲警報」が発令されたのです。

そして間もなく、敵機(B29)の大群が東京湾を北上し、私のいる深川地区上空に現れました。

余談ではありますが、この東京大空襲の日付は三月十日の未明と一般的に言われていますが、すでに九日の夜、我が家にB29から焼夷弾が投下されていましたので、その空襲のはじまりは、三月九日であると今でも思うところ です。

さて、そのB29が通過していくと同時にその悲劇ははじまりました。近所に数多くの焼夷弾が落ち、ありとあらゆるところで「火の手」が上がったのです。近所の家々はみな暗くしていたのですが、炎が舞い上がり照明が点いたように明るくなりました。その時父が私たちに「学校へ逃げろっ」と叫びましたが、私は学校へ逃げるのが恐くて仕方ありませんでした。この頃の父は、近所の「町役」を担っていたこともあり、家にぎりぎりまで残る必要があった為、私たち姉妹は、学校までバラバラ

に命からがら向かわなければなりませんでした。逃げる途中には、近所の仲の良かった友人のアパートに立ち寄ったりしたので、時間がかかりましたが、何とか学校の講堂に辿り着くことができました。講堂内はすでに、かなりの混雑で、立錐の余地もありませんでした。また、この講堂は立派なコンクリート造りの、かなり頑丈な建物でしたので崩れることはありませんでしたが、爆撃音が激しかったことは記憶に残っています。しかし、講堂の中に入らず、外にあふれ出てしまった人々が、その後どうなってしまったかとても気になるところでした。中に入れた人々の中にも、火傷を負って苦しんでいる人が大勢いました。

そのうちに、姉妹三人と父も無事に辿り着き、この時の混乱状況から考えれば奇跡的な出会いができました。きっと四年前に若くして亡くなった母親が、天国から見守ってくれたものと今でも思います。

そして三月十日になり、激しかった空襲が止み、家に戻る途中でまた凄まじい惨状を目にすることとなります。黒コゲの「マネキン人形」のような遺体をいっぱい見ました。防火槽に片方の足を入れて亡くなっている遺体は、怖くてよく見られませんでした。また、幼い子をかばって死んでいた母親の遺体は、あまりにも気の毒で、鮮烈

に憶えています。

### 喜連川への疎開

そして、私たち家族は、焼け野原になった中を家に戻ってみることにしました。すると、木造の我が家は焼け落ちていました。店の商品である味噌や塩も焼けて樽の中で塊となっていました。そのような中、ほんの一握りだけ焼けることなく、食べることができました。私たち家族は着のみ着のまま焼け出されてしまったため、弟が縁故疎開でお世話になっている栃木県喜連川まで行くことにしました。父がどこからかりヤカーを一台入手し、私たち姉妹を乗せて、喜連川へと向かいました。深川を出発して、私たち家族は一昼夜は食すること無く、只々、ひたすらリヤカーに乗ったり、上り坂ではリヤカーを押したりして、三月の寒さを感じることもなく、只々、黙々と向かっていました。その際、埼玉県か栃木県か場所の記憶は残っていませんが、おそらく私たちの服装で東京での空襲にあったとわかったのでしょう、通り沿いの農家の方がひとりひとりに、一個の大きなおむすびを恵んでくださいました。これがどれほどおいしかったことか、未だに忘れることができない味わいでしたし、小さな私にとって大いに人の情けを知ることとなっ

た出来事でした。

このような体験をしながら、私たちは目的地の喜連川には、四日後の十四日に到着することができました。何故到着日の記憶があるのかというと、その日が私の十五歳の誕生日だったからです。また、当時の思い出として深川の我が家には、まだ部屋にお雛様も飾り付けてありましたし、その他思い出の品々も全て失ってしまったことが心残りであり、また、これからどうなっていくのか、どうすれば良いのか、途方に暮れる日々を過ごすばかりでした。

### 夫の戦争体験

それから一週間ほどたって、私は、戦時中に勤めていた縁で、中央区月島の軍需工場の寮に身を寄せる事となりました。その事務所でタイピストをしていて、そこで八月十五日の玉音放送を聴きました。言葉の意味はよく解りませんが、戦争に負けたということだけは解り、涙が止まりませんでした。戦後は着るものも食べられるものも入手ができない中、事務所の方々に、ほんとうに助けていただきました。

その後、父親の知り合いがいたこともあり、武蔵境の地に来ました。そして今日まで七十数年にわたって、お

世話になっているところです。

そして、私は昭和三十年三月に、地元男性と結婚しました。夫は、大正十五年農家に生まれました。当時は戦争に行かなければ「国賊」と言われる時代でしたので、夫は弱冠十六歳の若さで南方シンガポールへ出征して行きました。よほど苦勞を重ねたのか、亡くなるまで、自らの体験を好んで口にすることはありませんでしたが、幾つか本人から聞いた話を紹介したいと思います。

戦地が南方であったため、酷く蒸し暑く、気候に順応できず体調を崩す兵士も多く、また、移動は徒歩だったのでかなりハードだったそうです。さらに食料面でも苦勞し、自らの手で狩猟したイノシシ等を焼いて食したりしたようですが、これはかなりの美味しさだったとのことでした。何も入手することが困難な場合には、野ネズミをつかまえて焼いて食べた経験も話していました。このように苦勞をしていましたが、ジャングル内に自生しているバナナは、腹を壊すくらい食べられたそうです。

そして、本人から多くを語ることが無かった最大の理由として、自分自身が敵に応戦している際、近くに落下した砲弾による爆風で吹き飛ばされ、背中かなりの深手を負い、負傷したまま終戦を迎え、何とか戦地より帰還した体験が、生涯を通して脳裏から離れなかったから

だったようです。

### 戦後の摩訶不思議な体験

すでに、戦後七十年以上たちますが、私は最近まで、摩訶不思議な体験をしていましたので紹介したいと思えます。

それは東京大空襲のあった三月十日前日深夜には、必ずと言っていいほど、敵機（B 29）が上空を飛来する「ゴッオ、ゴッオ」といった轟音によってうなされ、朝目覚めることが続いていました。そのため、たとえ三月十日の空襲のことをうっかり忘れていたとしても、思い出すこととなりました。その際私は、十万人もの尊い命が奪われた悲しい現実に対し、只々手を合わせ、お祈りをする事を心がけて努めてまいりました。

### 若い世代に伝えたいこと

昭和二十年八月十五日の終戦以降、すでに、七十年余りが経過し、今改めて思うことは、「今現在、この時代がいかに幸福であるか」ということです。なぜなら、私たちの暮らすこの日本は、「火山列島・地震大国」で更に、風水害も頻繁に発生しており、特に甚大な災害時には、必ず諸外国からの援助や協力等が得られるからです。

このことは、何より「平和であることの証である！」ということを決して忘れないで欲しいと思います。

当時の私たちは、国を立て直していくことが先決で、自分たちが入手できる援助は極々わずかなものであり、明日以降どうやったら生き延びていけるのか不安だらけの日常でした。ですから、平和を維持していくことは難しい面も多々あると思われませんが、世界中の一人でも多くの人々と話し合う機会をもち続け、一つ一つの諸問題を乗り越えていって欲しいのです。それを実現するためには、今後活躍される若い皆さんひとりひとりの一人を人と思う広い心を持ち続けていく「真心にあると思っています。」



昭和 21 年 元加賀国民学校同窓会記念写真  
前から 3 列目右から 5 人目が猿渡松子さん。  
東京大空襲時に避難した講堂で、後方の壁に  
当時の煤が残る。

## 十三 私の戦争体験

境 すぎさき  
杉崎 かずこ  
和子

### 戦中の様子

私は昭和八年六月二十二日に生まれ、戦争が始まったときは霞町（現在の港区麻布・旧筈（こうがい）町）に住んでいました。昭和十八年、私が小学校四年生だったときのことです。当時、四谷三丁目から新宿へ行く都電があり、それに乗っていたのですが、外を馬に乗った兵隊さんが通りました。車内には、おそらく階級が下の兵隊さんが乗っていたのですが、敬礼をしなかったようで、電車を停めてその人を降ろしてしまいました。その後のことは分かりませんが、とても印象に残っています。

また、三連隊から代々木練兵場の往復にうちの前を通りました。兵隊さんの人数が足りず、年齢の高い人も混ざっていました。あるとき、うちの前で、疲れてしまった年上の下士官に、しつかりしろということの上官の若い兵隊さんがバケツに水を入れてかけていたのです。子ども心に、なんであんな年をとった人に、若い兵隊さんがそういうことをできるのかと思っていました。

西麻布に長谷寺（ちようこくじ）というお寺があり、

夏休みにラジオ体操をしたりしていましたが、戦時中は、戦地に行く前の兵隊さんが集まって寝泊りをしていました。私の家では、商売をしていて、注文されると私が届けたりしていました。上官と思われる人が、美味しいものを食べていました。兵隊さんたちは、夜中のうちに外地に行ってしまったいました。可愛がってくれた兵隊さんとは手紙のやり取りをしたり、千人針を送ったりしていましたが、戦後はどうなったか分からない状況です。

### 栃木への疎開

私が通っていた麻布区の筈（こうがい）小学校は、三階建の鉄筋造りで、水洗トイレ、暖房はスチームと整っていたのですが、戦争が激しくなり、私が小学校五年生の八月十五日に、栃木県の宗泉寺（そうせんじ）に集団疎開することになりました。五年生の一組と三組が男子二組と四組が女子という男女別のクラス分けで、四クラス中三クラスが同じお寺へ行きました。本堂を除いたところに持って行った布団を敷いて寝ていました。トイレは外に新たに作られていました。朝は太鼓の音で起き、お寺の境内に集まって体操をし、栃木の学校の教室を借りて授業を受けました。そして、学校から帰ってきたと

ころの「お化け屋敷」と呼んでいた寺の別棟で自習をしました。

ある日、学校から帰ってくると、男の子が男の先生にすぱーんと叩かれて、廊下の端から端まで吹っ飛んでしまいました。その子が書いて自分で出したと思われる、検閲なしの手紙が投函されていたということで、郵便局から手紙が返されてきたようでした。私たちが親に手紙を書くと、先生に渡して出してもらうことになっていたのですが、子どもが書いたそうした手紙すら、先生に検閲をされていたのです。

私は、親が高齢のため、集団疎開では心配で、疎開から一か月ほどで、東京へ帰ることになりました。当時、男子とはあまり話をしたことがなかったのですが、ある男子児童から「いいないいな、お前は今日帰れるぞ。お母さんが迎えに来てるぞ。」と言われたことを、とてもよく覚えています。

東京に帰ってきてからは、もとの小学校に通いました。ある日、なぎなたの時間に、友達となぎなたを選んでいたら、警戒警報でなく、いきなり空襲警報が鳴りました。びっくりしてランドセルを背負って、一生懸命、霞町（現在の港区麻布・旧筈（こうがい）町）の交差点の方へ逃げました。すると、B 29がもう飛んで来ています。

地上からも高射砲で対抗していますが、届きません。私は、友達と交差点を泣きながら渡りました。角に変電所があり、その人が呼んでくれたので、そこへ逃げ、落ち着いてから帰宅しました。

### 別所温泉への疎開

その後、十一月に、姉と一緒に別所温泉に縁故疎開しました。両親は東京に残りました。一年生から青年学校（今の中学校二年生）までが同じ学校で、田舎でしたから、校庭が二面あって、とても広かったです。その校庭で、小学校一年生から青年学校までの八学年が学年別に走りました。冷たくて苦しくて、泣きながら走っていたことを覚えています。また、山へ暖房の薪を拾いに行くこともありました。取ってきた薪を使い、大きな火鉢のようなもので暖をとっていました。それまで、山に登ったことがなかったので、大変でした。山の上の寺の木を切つてあるのを引きずってきたり、田んぼの脇で枝豆を作ったり、桑畑へ肥やしを持って行ったりもしました。

### 東京大空襲

昭和十九年三月十日の東京大空襲のとき、西麻布の私の家は焼けてしまいました。小さい家なのに、焼夷弾が

家に四本も落ちたそうです。前日に、母が別所温泉まで荷物を送ろうとしたのですが、その日の分は終わってしまったということで、持ち帰ったところ、空襲ですべて焼けてしまいました。疎開先に、叔父から「麻布の家焼けた」と電報が入り、私は初めて東京での空襲を知りました。その電報を聞いたときは、両親は亡くなったのだろうと思いました。しかし、青山墓地や小学校に逃げた助かったそうで、別所温泉に姉の主人が両親を連れてきてくれました。

### 終戦後の生活

戦争が終わった後、姉家族は吉祥寺の社宅に入る事になったのですが、空襲によって家が焼けてしまった私には、帰る家がありませんでした。

父親が、焼け跡に掘っ立て小屋を作りました。知人が届けてくれた窓を取り付けたりして、六畳敷きくらいの家ができました。

昭和二十一年の四月に、六・三・三制になる前の最後の女学校に入学しました。お弁当に詰めるものが無くて、母が後から煮物を作って学校に持って来てくれました。配給の玄米を一升瓶に入れて、棒でつついて精米しました。女学校では、教科書は冊子になっておらず、新聞の

ような形に畳まれており、自分で切って紐で結んでいました。友人のおじさんが浴衣の柄をデザインしていたので、その原画をもらって、表紙にしてみました。

戦争は絶対にやってはいけません。日本も海外でひどいことをしましたが、それも戦争がさせたことです。若い人達には、ただただ戦争をしないでほしいと願っています。

## 十四 戦時中のはなし

（阿佐ヶ谷、三鷹（武蔵境）、米子時代を振り返って）

八幡町 知和 晴子

一九三〇年生まれのはなし、第二次世界大戦といってもピンと来ず、支那事変や大東亜戦争などと言われた方が分かります。

私が、戦争がはじまったとはつきりと認識した日は、一九四一年十二月八日、阿佐ヶ谷の杉並第七尋常高等小学校六年生の時でした。突然生徒たちが校庭に集められ、校長先生が真珠湾攻撃の話をされました。とても寒い日でした。そして、その話のすぐ後、生徒の代表数名が神社に行き、兵隊さんたちの武運長久を祈願しました。

それから、日本国軍が、どここの国へ侵攻して占領したという話があると、大人も子供も集まって、甲州街道を行列して歩きました。昼間は日本の国旗を振って旗行列を、夜は蠟燭ろうそくに灯りをともした提灯をもって提灯行列をしました。蠟燭の灯りは、揺れると提灯に燃え移りそうでした。

しかしながら、やがて本土への空襲がはじまると、行列も行われなくなっていきました。その頃には、すでに

日本が不利なのではないかと、子供ながらも感じるようになっていました。

学校は、集団登校へと変更になりました。学校の登校口は三つあり、登校してくる方面と居住区によって班がつくられました。六年生だったこともあり、班長になり、二十人くらいの生徒とともに登下校しました。ただし、班長に任命される前には、試験がありました。校庭の端に立ち、反対側の端にいる生徒たちに声が届くか試されたのです。声はつきりと届くことが大切でした。また、一年生から六年生までの同じ班の子たちの顔と名前がすぐに一致するかも試されました。

体育の授業内容が変更になり、攻守のための薙刀の稽古がはじまりました。火を消すためのバケツリレーも練習しました。朝のラジオ体操の前には「見よ、東海の空明けて」という『愛国行進曲』を皆で歌いました。鍛錬という名目で、懸垂、腕立てなどで競い合うこともあり、出来具合によって級もつけられました。

学校の先生は「落ちているものは拾うな」とよくおっしゃっていました。米国の飛行機が、万年筆など子供の好きそうなものを飛行機から落として、それをいじると爆発するからだということでした。しかし、子どもたちは、飛行機が通り過ぎると、隠れていたところから出て

きて、ビラなどを拾っていました。私は厚手の銀紙のテープ状のものを拾いました。これは、無線連絡の電波妨害のために空からまかれたものでしたが、子どもにとつては、キラキラして綺麗だったのです。

その後、私は、杉並の城右高等女学校（江戸城の右に位置することから城右の名称）に進学しました。最初のうちは、まだ授業もあり、論語、裁縫、行儀作法などを学んでいました。

体育の時間では、二面あった校庭の一面をジャガイモ畑にするため大きいスコップで耕し、畝<sup>うね</sup>を作りました。しかし、収穫されたジャガイモを私たちが手にすることはありませんでした。

高等女学校二年生で、勤労奉仕に動員されました。私のクラスの五十名ほどは、三鷹の井口にあった中島飛行機下請け計器製作所に行くことになりました。（別紙①は、武蔵境駅から製作所までの地図と、製作所内建物の配置略図）。



当時使用した電車の定期券



町内の隣組の人々で防空壕を作った時の集合写真

早朝、阿佐ヶ谷駅から電車に乗って武蔵境駅へ向かいました。立川などの工場へ向かう人々が多いためか、電車は毎朝満員で、扉が開いてもすでに乗車している大人たちでぎゅうぎゅう詰めだったので、子供がそこに乗車するのは大変でした。ある朝、乗ろうとしたものの乗れず、片方の靴だけが電車の中に入ってしまった。靴は支給されたもので、当時はなかなか手に入らなかった。靴ので、父親に叱られてしまうと、片足を裸足のまま慌てたことを覚えています。

当時、武蔵境駅に南口はありませんでした。電車を降りるとすぐに道で、北側に降りて道を進んだところにあった郵便局脇に、通行人の邪魔にならないように気をつけながら、級友数人で集まりました。級友は武蔵境に住んでいる人も多かったので、一人で製作所へ通う人もいて、そこに集まるのは十四〜十五人程度でした。早朝



昭和 13 年度通知箋身体状況欄

の武蔵境駅では、貨物列車がホームへ荷下ろししていることが頻繁にあり、東京駅からの荷物を降ろすと、引き込み線を利用して、列車は東京駅へと戻っていきます。製作所へは、日赤前を通過して歩いていくのですが、日赤よりも手前にあった広場に、突然大きな高射砲があるのに気が付きました。大きな筒が空へ向かってドンと置かれていた高射砲の姿は印象的でした。

製作所では、級友らそれぞれ配属される場所が異なっていて、私は飛行機の計器の針を鉄板から切り出す作業を割り当てられました。万力まんりきという道具に鉄板を挟んで、その鉄板に描かれた線に合わせて鉄やすりで鉄板を削りました。身長は百五十センチもなく、体重は二十五キロもない女学校生にとって、一日中立ったまま力を入れて鉄やすりを動かす作業は、かなりの重労働でした。

勤労奉仕の場所へは、学校の学年担当の先生が交代で様子を見にいらっしやることがありました。休憩時間には、先生と生徒皆で『お山の杉の子』などを小さな声で歌いました。今思えば、作業場では火の粉が飛び散り、指を切断してしまうかもしれないような大怪我も心配される作業が続く中、歌声によって会社全体が少しなごんだのではないかとも思います。

昼食は支給されましたが、握りこぶしより小さく固い小麦粉の団子が、ぼつんとひとつ、鯨油を薄めた液体の中に浮かんでいるだけでした。団子は、皮つき的小麦粉がつぶしてあったので、黒色をしていました。鯨油はにおいがきつくまじったし、蠅がたくさんたかっついて、さらに真っ黒になっていることも多かったです。人が近づくと、その蠅たちは、ぱつと一斉に飛び立ちました。

作業服も支給されましたが、横糸は紙をよったもの、縦糸は細い木綿の糸でできていました。深緑色の作業服は、ちよつとした作業ですぐ破けてしまいました。鉄も布切れもだんだんと日本になくなっていったことを象徴するような品質でした。

仕事が終わると解放された気分、駅まで五く六人で走り、電車が一番前に乗って、まだ踏切を渡っている友達に手を振りました。

戦争が進み、だんだん機械で切り出す材料もなくなってきたため、私は現場事務所（工務室）の原価計算係に異動となりました。空襲も激しくなり、朝いつものように製作所へ向かって歩こうとすると、武蔵境駅前には空爆によると思われる大きな穴があいていました。製作所の事務所の屋根にも大きな穴があき、机は壊れていました。阿佐ヶ谷の自宅付近も焼け、クラスの友達も次々と疎開していき、とうとう私も父を残し、鳥取県の米子市へ疎開することになりました。

一九四五年四月、早朝の東京駅のホームには、東海道線の大阪行きが汽車がすでに入っていました。片方は東京駅五時二十五分発、もう一方は六時二十五分発。始発に乗るとすぐに発車のベルが響き渡りました。すでに日が昇りはじめており、汽車の窓から見える景色は焼け跡でした。横浜、川崎……ずっと焼け跡が続いていました。浜松の駅で警戒警報があり、当時のメモに「怖かった」と記録していました。

鳥取県米子では、淑徳高等女学校の四年生に転入しました。疎開先の家は、米子駅と後藤駅の間の踏切近くにありました。踏切の向こう側には綿畑が広がり、その先は海岸でした。家の窓からは、米子駅の屋根がよく見え

ある日の昼間、窓から駅の方を見ると、米国の飛行機が一機急降下してきて、駅の広場へ向けて銃撃をおこなっていました。おそらく駅の広場には人々がいたはずですが。

疎開先の米子でも勤労奉仕に動員されました。級友とともに、大篠津の飛行場裏の海軍航空廠の庁舎（皆が庁舎と呼んでいた）での勤労奉仕にあたりました。そこには修理工場もあり、すでに爆撃された跡もありました。防空壕は水浸しで崩れていました。夜見ヶ浜にあった防空壕は、海岸端の砂地にあり、掘ってもすぐに水で埋まってしまい、使用できませんでした。

勤労奉仕では、いろいろな作業をしましたが、汲み取り便所に溜まった排泄物を女性二人で桶に担ぎ、遠い畑まで捨てに行ったことを覚えています。送られてくる書類にカーボン用紙を挟んで手書きで複写する作業にも従事しました。

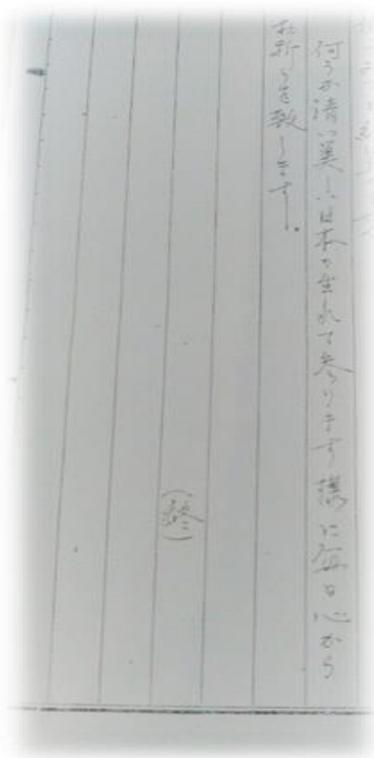
ある朝、勤労奉仕に向かうため、級友たちと後藤駅までの線路脇の道を歩いていると、米国の飛行機が、乗ろうとしていた列車の上空を飛行し、列車を追いかけながら音がしました。いつもなら階段を上がって切符を買うのですが、階段を上がらず、細い道を家々にそって逃げました。集団で逃げると飛行機に追いかけるので、皆ばらばらになって逃げました。垣根の間を逃げることに

で、隠れ蓑になりました。すると、すぐに銃撃音が響き、乗ろうとしていた列車が銃撃されたことがわかりました。

私が終戦を知ったのは、海軍航空廠庁舎内でした。

一九四五年八月十五日、天気が良くて暑かったのを覚えていますが、庁舎内で働いている人がラジオの前に集められると、ラジオからは正午の玉音放送が流れはじめました。私は内容をよく聴きとることができなかったのですが、海軍航空廠の廠長さんが「戦争が終わったんですよ」と教えてくれました。皆静かに自分の仕事場へと戻って行きました。

終戦後すぐ、女学校で書いた作文があります。一九四一年十二月八日（開戦）から三年八か月が経過した時に書いた『終戦に対する所感』と題するその作文は「清い美しい日本が生まれて参ります様に……」と、祈りの気持ちで締めくくられています。

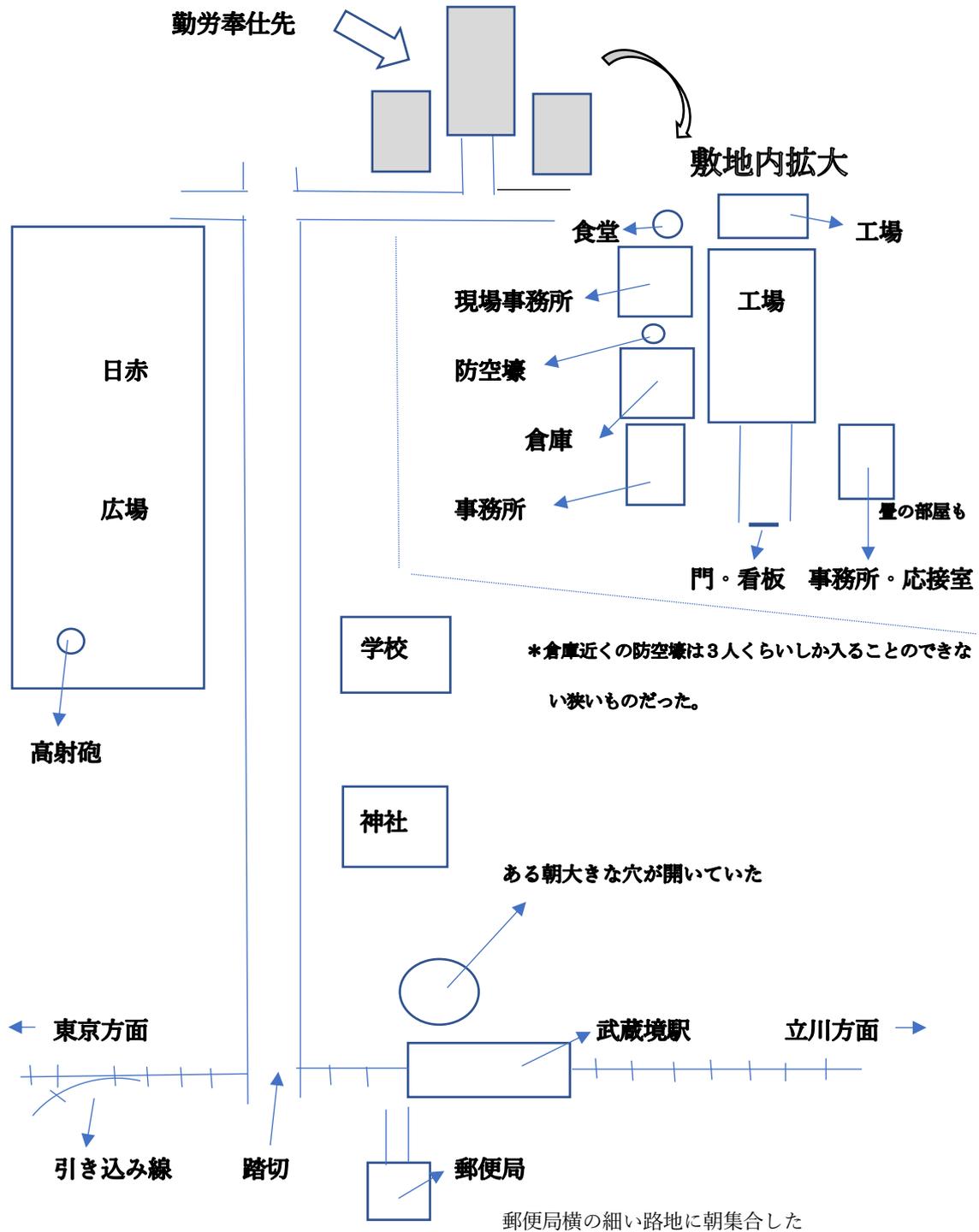


終戦当時の作文より

最後に、今回、残存していた各種資料（史料）を保存・活用していただくことにご尽力やご協力をいただいております。深く感謝と御礼を申し上げます。

五十年後、百年後に、こんな時代もあったのかと、何かの参考にもなれば幸いです。

別紙① 当時の武蔵境駅から計器製作所までの道のりと、製作所内建物の配置略図



## 十五 三度の疎開経験

吉祥寺北町

山田 やまだ シズ

### 第一の疎開 縁故疎開

私は昭和七年生まれで、新宿の牛込区揚場町で育ちました。飯田橋駅の近くです。小学校三年生だった昭和十六年十二月、真珠湾攻撃で戦争を知りましたが、その頃は生活に大きな変化はありませんでした。昭和十七年の二月にシンガポールが陥落したときには、全校児童にゴムボールが配られ、当時遊び場だった神楽坂の毘沙門様で、のん気にまりつきをしたものでした。

昭和十八年、小学校5年生のとき、現在の東京理科大学の学生が二十人程小学校に来て、校庭で遊んでくれました。学生服の素敵なお兄さんたちでしたが、その後すぐに、学徒出陣で出征されたそうです。憧れていた先生も出征して、学校からいなくなってしまうました。

昭和十九年、小学校六年生になると、都心部の空襲が激しくなったため、親戚等を頼って疎開できる人は、東京を離れていきました。四月に親元を離れ、父の実家の千葉県へ縁故疎開しました。夏休みになって、一時的に帰京した時、疎開先に帰りたくなくて泣いた私を見かね

て、疎開先に戻らなくてもよいと言ってくれました。

### 第二の疎開 学童疎開

昭和十九年の夏には都心部への空襲が激しくなってきました。私がついていた新宿区立津久戸小学校では、現在の栃木県鹿沼市内の三か所のお寺に、小学校三〜六年生が約八十人ずつに分かれて集団疎開をしました。私は縦山村の光明寺に疎開しました。お寺の住職夫妻や地元の方が面倒を見てくれました。学年二人ずつで八人の班を作り、みんなで村の学校へ通いました。朝ご飯から通学、夕飯、就寝まで班で行動しました。下級生が親を恋しがって泣くので、六年生の私は、自分も泣きたいのを我慢しながら、下級生を励ましたりあやしたりしたことを覚えていきます。

荷物はすべて行李に詰めてあり、母が綿入れ半てんを持たせてくれたのですが、冬が来るととても寒かったです。もちろん、暖房はありません。大きな本堂で、ご本尊様の前に全員で頭合わせに布団を敷いて寝ました。

疎開が始まった八月頃は、食事をいただく小屋に窓ガラスがついていませんでしたが、冬には窓ガラスをつけられました。食事のことはあまり覚えていませんが、みそ汁に大根が一つ浮いているくらいでした。お正月に

は、お餅をいただいたこともありました。

一番辛かったのは、栄養不足で足の爪の間が化膿してしまった時です。お医者さんで麻酔をして爪を取りました。麻酔が醒めた時には痛くて寒くて、泣きました。その時は、母が来てくれて、翌日、お寺の車夫さんに、人力車でお医者さんへ連れて行っていただきました。

一度だけ、父が会いに来てくれたこともあります。父と先生とで協力して、男子の頭をバリカンで刈っていたことを思い出します。

## 帰京

昭和二十年の二月になると、私たち六年生は卒業のために東京へ帰りました。二十人くらいで帰ったのですが、帰りの列車の中でみんな泣きました。

戦火の中を帰る私たちに、光明寺の住職が一人ひとりに書をくださいました。それは、「忍」という文字です。いただいた時には、その文字の意味など、わかりませんでした。その後の疎開や戦火を逃れての引越しの際にも親が持っていてくれたので、十年程前に表装し、現在のご住職に箱書きをお願いしました。その際、しみじみとこの文字の意味を考え、卒業生へのはなむけの言葉に耐え忍ぶという意味の「忍」と書かねばならなかった、

この時代のことを思わずにはいられません。今は、八月十五日の終戦記念日の頃にこの書をかけて平和を祈ります。

帰京するとすぐに、三月十日の東京大空襲がありました。焼夷弾がばらばらと落ちる夜空は、美しいくらいでした。私の家は防空壕がなかったので、縁の下へ逃げました。お濠が境となったのか、消失は免れました。次の日は家の前を、やけどを負った人や、子どもを背負った人がぞろぞろ歩いていました。

## 二度目の縁故疎開

大空襲の翌日、子どもを東京に置いてはおけないと両親が話し合い、すぐに、母の実家である現在の茨城県に疎開しました。そこで高等科に入学しました。とても勉強できる環境ではなく、畑仕事をしていました。

戦闘機を造っていた太田飛行場が近くにあり、七月には、女学生は鉄集めのための釘抜き作業に駆り出されました。その頃には、戦闘機は一台もなく、飛行場も使われていませんでした。子ども心に不思議に思い大人に尋ねたところ、兵舎が攻撃目標になってしまうため、解体作業をするので、その廃材から釘を抜いているとのことでした。ある日、空襲警報が鳴って、敵機が二〜三機飛

んできました。防空壕がなく、近くにあった穴の中へ傘を開いて身を隠しました。相手は面白半分だったのでしよう。私たちには当てずに地面を撃つだけでした。初めて間近で敵機を見て、ものすごく恐ろしかったです。

## 終戦

七月中旬には、疎開先の母の実家で、病弱のために兵役を逃れていたおじにも召集令状が来しました。私たちを預かる状況ではなくなつたため、七月三十一日に父が迎えに来ました。でも、東京大空襲では焼けなかった飯田橋の家も、私が疎開をしている間に、その後の空襲で焼けてしまったため、八月初めに現在住んでいる武蔵野に引っ越しました。

心機一転、八月から商業学校に通い始めました。武蔵野でも空襲がありました。私は学校にいたので難を逃れました。せっかく入学した学校でしたが、やっていたことは勉強ではなく、学校の校庭に作られた工場での作業でした。

ある日、工場長がラジオを引っ張ってきて、玉音放送を聞きましたが、雑音ばかりだったので何のことかよくわからず、工場長がものすごく怒ってラジオをひっくり返していたことだけ覚えています。これからどうなっ

しまうのか、とてもとても不安になりました。

## 子どもたちや若い世代に伝えたいこと

私は、人にお話をするのは苦手ですが、どうしても、この辛くてむなししい戦争の体験だけは、生きているうちに若い方に伝えなければならぬと思ひ、今回、お話しいたしました。

疎開は、みんなと一緒に心強かつたこともありましたが、無理やり親と離れて、悲しく寂しく、本当に辛かつたです。また、終戦の時に小学校を卒業して上の学校へ進学する年齢だったにもかかわらず、何度も学校を変わつたり勉強もせずに武器を作つたりと、大変な経験を行いました。卒業式もしていません。

今は、世界の中で日本が経済、文化など、しっかりやつていくには大変な時代だとは思いますが、国と国同士の戦争だけは、どんなことがあつても反対して避けてほしいです。

この辛い体験をぜひ記録していただき、戦争の恐ろしさを体験として知らない方々でも、決して戦争をしない平和な国を作つていただきたいと思います。



学童疎開の出発式



光明寺の住職から六年生に贈られた書

疎開学童一日の日課 記録写真に序

百分一見にとの諺通り、といふ我子の疎開先の毎日を知り度、……わ皆親心  
 で唯しもが用立て有るが 風の便りが又ハガキの便りとわ 聞くと 見るとわ  
 大變な相異有る 第一に子供の爲に健康地で学童は皆元氣其者で  
 土地子に在り様と居り又物資の集りが役所の命令的に集り此土地の  
 貸入側の協力や都舎の親とて全く深謝に在りて居る  
 又二十四時間を共ニ暮す先生又療母の方々の御苦勞が生活教育健康に夜も朝  
 迄寤ることも在り實に涙ぐましい實の親以上に責任を感じて子供を一人々見つめて  
 居る姿に唯が頭を下げて居るに居るに 絶對子供は当局へ御任せして安心して  
 此の目前にせまる大決戦 瑞帝都に於て心残りなく大激闘の決戦を  
 續け、ど行ても此の最後の決戦に勝ち抜かざればならぬ

昭和十九年九月八日 撮影 現像 引仲 自作 星野孝次

学童疎開について

## 十六 私の戦争体験

中町

余田よでん（旧姓・赤松あかまつ）

縁ゆかり

### 生い立ち

私は、昭和七年に横須賀で生まれました。五人兄弟の長女です。父は海軍将校で、母は歯医者娘でした。父の仕事の都合で、兵学校のある江田島で育ち、軍港のある呉、商船学校のある神戸へと引っ越しました。神戸で小学校に入学しましたが、すぐに呉へ引っ越し、小学校五年生まで呉で過ごしました。戦争が開戦したのは小学校三年生のときです。大変なことになったと思いました。父が軍人でしたので、生活に難儀したということはありませんでしたが、いつも父のそばに死を感じて、おびえていました。

父は神通や伊勢に乗っていました。呉では、小高い公園に行くと、ときどき軍港に軍艦が入ってくるのが見えます。軍艦が入港してくるのを見て、街まで父を迎えに行きました。父は、私たちと出会ったとたんに、敬礼をしてくれるのです。そして、帰りにつば焼きのやきいもを買ってくれました。いつもそれが楽しみでした。しかし、戦争が始まってからは、軍港を見ることはできなくなりました。

なりました。

小学五年生のとき、父が横須賀の砲術学校に勤務となったため、家族で横須賀に引っ越しました。そのとき、荷物の半分を呉に残し、もう半分を横須賀に持って行きました。呉に残した荷物は空襲で焼けてしまいました。自分たちは父の転勤のおかげで難を逃れました。横須賀にも軍港がありました。軍艦が見えないように目隠しがされていました。

### 学童疎開

小学校六年生のとき、二歳下の弟と一緒に神奈川県愛甲郡に学童疎開しました。出発の日には、校庭で出発式を行って、母に見送られました。疎開先では、私は勝楽寺というお寺にお世話になりました。男女別で班を作るので、弟とは宿舎が違って、少し遠いところでした。

学童疎開中、父母と別れた悲しみはもちろんありますが、日本が劣勢なのではないかという話を聞いて、子どもながらに大変だと感じていました。それでも、地元の人々が、外にお風呂を作ってくださいたり、食べるものを差し入れてくださったりして、大事にされていたと思います。夜寝る前に、両親の方向を向いて、手を合わせてお祈りしていました。いつ命がなくなるかわからな

いという時分でしたし、私は父が軍人でしたので、必死の思いでお祈りしました。

弟が滞在している宿舎は、子どもの足では遠い場所でした。弟の宿舎で木から落ちて大けがをした人がいると聞いて、宿舎の場所もわからないのに、先生に黙って勝樂寺を抜け出したことがあります。なんとか宿舎までたどり着いて、けがをした人が弟ではなかったことを確認して、安心して勝樂寺に帰ることができました。先生は私が抜け出したことを知っていたと思いますが、怒られはしませんでした。

学童疎開中に一度だけ、一番下の弟を背負った母が面会に来てくれたことがあります。勝樂寺には上がらず、お寺の階段の下で話して別れました。前日に駄菓子屋で引いたくじに「明日のよるこび楽しみ」と出ていたので、母に会えたときは本当にうれしかったです。

戦況が思わしくなくなってきたのがわかり、横須賀が危なくなるのではないかと噂が立ちました。学童疎開では家族がばらばらになってしまうという思いもあったのか、縁故疎開することになりました。愛甲郡に父が迎えに来て、学校の皆さんにお別れしました。

横須賀では、縁故疎開するまで、父の趣味の話の聞いたり、スーパ―に連れて行ってもらったりしました。父

は器用な人だったので、ピアノ、短歌、編み物などを趣味としていました。時間のあるときに手袋を編んでいたのを覚えています。

### 縁故疎開

軍人の父は疎開できませんので、父以外の家族で兵庫県丹波に縁故疎開しました。丹波は父の故郷です。縁故疎開する前にも、夏休みには弟と遊びに行っていました。後に母に聞いたところ、私と弟が丹波に遊びに行かされていたのは、食糧難という事情があったようです。

縁故疎開の日、丹波に行くために東京駅まで父が送ってくれました。駅前で輪になって、篠山のデカンショを歌っている人達がいました。篠山は丹波から近いのでよく印象に残っています。父に何をしているのか聞いたところ、大学生が出征していく同級生を送っているのだと言っていました。

父のいない丹波の生活はつらかったです。当時、縁故疎開は良く思われていなかったようです。「疎開人」と呼ばれていじめられていました。父の実家は大きな家でしたが、私たちが嫌な思いをしないように、実家とは別に家を借りてくれました。

全国的に食糧難でしたが、私の家族は田んぼをほとん

ど持っていなかったので、ヨモギや大根ばかりで暮らしました。食材を炊いて食べるのですが、ほとんどが水でした。一度、ぐらぐらに煮立った鍋をひっくり返してしまったことがあります。やけどはしませんでしたが大泣きました。みんなが食べられなくなってしまいました。家族は誰も私を責めませんでした。辛抱してくれたのだと思います。

丹波の小学校の先生は立派な人でした。なぎなたに秀でた立派な先生で、放課後に残って女学校の試験の勉強をさせてくれました。女学校への入学は狭き門でしたが、六人中四人が合格しました。山の中の小学校に登下校するときは、毎日軍歌を歌いながら通学しました。横須賀ではそんな習慣はなかったので、丹波の独自の風習だと思います。

小学校卒業後、女学校に入学して奉仕活動をしました。毎日わらで草履を作りました。草履は今でも作るすることができます。家から駅までの片道四里（約十六キロメートル）を自転車で通いました。学校の展示会に習字を出すのに、墨や硯がありませんでしたが、父がカメラを売って墨や硯、半紙を買ってくれました。入学後すぐの夏に終戦を迎えました。終戦後には、墨で教科書を塗りつぶしました。

## 父の復員

毎日、父が無事に帰ってくるよう神棚に手を合わせていました。父は最終的に少佐になったそうです。戦艦大和に乗る予定だったところを、御縁があつて戦艦大和には乗らずに内地に残ることになり、命拾いをしたそうです。父の部下のほとんどがそのまま戦艦大和に乗って、全員亡くなったそうです。終戦後丹波に帰ってきてくれたのですが、父は死ぬまで「自分が生き残って申し訳ない」という気持ちを抱えていました。そんな父をみて、子どもながらに戦争は嫌だなという気持ちを持つて育ちました。

父は三年以上もの間、公職追放にあっていましたが、丹波で炭焼きやアイスクャンディーを売って、子ども五人を育ててくれました。それまで農作業をしたことがなかった父ですが、田んぼを借りてジャガイモや玉ねぎを育てました。女学校一年生にしては体が大きかったので、私も父の手伝いで下肥を桶に入れて、天秤棒でかついで運びました。私が女学校に入学してからは、奉仕活動に時間を費やしていたため、勉強をする時間はほとんどありませんでした。しかし、教育は大事だということで、きちんと学校に行かせてくれました。おかげで、兄弟五

人はみんな勉強して幸せになることができました。

### 戦時中を振り返って

父が軍人だったので、呉や横須賀、神戸など、今思えば危険な地域にも住んでいました。学童疎開で行った愛甲郡は、マッカーサー元帥が降りた飛行場に近い場所です。そういう場所に縁があるのかもしれない。今でも、「横須賀」という文字を読むと郷愁を感じます。

今思えば、生活苦はありましたが、身の危険を感じることはありませんでした。私は家族一人欠けることなく戦争を終えることができました。本当に幸運だったと思います。

疎開も経験しましたが、どこにいても大切にされました。父が大事に育ててくれたおかげだと思います。戦争を乗り越えられたのは、父や母のおかげです。

### 子どもたちや若い世代に伝えたいこと

平和は大切です。戦争をしてはいけません。最初は小さなことでも、積み重なって大きくなります。争いもそうです。大人がしっかりしなければなりません。平和が続くことを願っています。



二 中島飛行機武蔵製作所の記録



市では、戦争や空襲の悲惨さを継承するため、武蔵野の空襲などに  
関係する箇所に、平和案内説明板を設置しています。

下の写真は、平成30年度に市が資料提供を行い、都立武蔵野中央  
公園に設置された案内板です。

ここは、東洋一といわれた航空機エンジン工場＝中島飛行機武蔵製作所の跡地であり、  
マリアナ諸島からの日本本土空襲の最初の目標となった場所です。

I



1944年11月7日 米軍が撮影した中島飛行機武蔵製作所の全景（米軍資料）

この都立武蔵野中央公園の場所には、戦時中、中島飛行機武蔵製作所という  
東洋一といわれた航空機エンジン（当時は「発動機」と呼ばれました）の大工場が  
ありました。零式戦闘機（通称「零戦」）や一式戦闘機「隼」のエンジンもこの工  
場で製造されていました。そのために、先の大戦末期の1944（昭和19）～1945  
（昭和20）年にかけて、アメリカ軍によって激しい空襲を受けました。

アメリカ軍は、1944（昭和19）年7月にマリアナ諸島サイパン島を占領し、  
そこに大型爆撃機B29の基地を築きます。そして、同年11月24日には、同島  
から日本本土空襲を開始しました。その最初の目標が、この中島飛行機武蔵  
製作所でした。それ以後、この工場は合計で9回の空襲を受け、工場内だけで  
200名以上の犠牲者、工場をはずれた爆弾によって周辺の地域でも数百名の  
市民が巻き添えとなりました。

この説明板のある場所は工場のほぼ中心にあたり、空襲の際には「爆撃照準  
点」(Aiming Point) として、たびたび標的となりました。

—中島飛行機株式会社—

ここに工場を開設したのは、中島飛行機株式会社という戦前日本の  
航空機製造のトップメーカーでした。同社は、群馬県出身の海軍機関  
大尉であった中島知久平（1884～1949年）が、兵器としての航空機に  
注目し、その開発・製造には民間企業の創設が必要であるという考え  
から海軍を辞め、1917（大正6）年に郷里で飛行機研究所を創設した  
ことに始まります。やがて、太田製作所（陸軍・機体組立）、小泉製作所  
（海軍・機体組立）など群馬県を中心として、おもに東日本に展開しました。  
東京では、1925（大正14）年に、エンジンの設計・製造のため、東京  
製作所（後の荻窪製作所）が開設されたのが最初です。

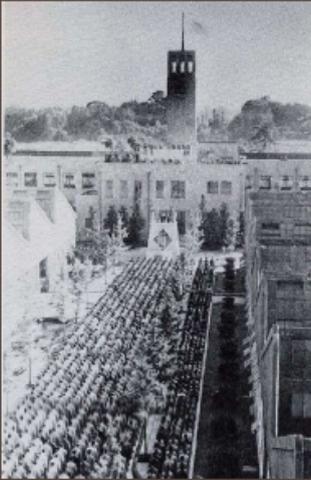
同社は、日中戦争（1937～45年）、太平洋戦争（1941～45年）にとも  
なって急成長を遂げます。同社の代表機は、九七式艦上攻撃機、一式  
戦闘機「隼」、二式戦闘機「鍾馗」、四式戦闘機「疾風」、夜間戦闘機  
「月光」などです。その他に、三菱重工業株式会社が開発した「零戦」  
も、エンジンはすべて中島飛行機で製造され、機体も3分の2が中島  
飛行機で製造されました。太平洋戦争期には、中島飛行機株式会社と  
三菱重工業株式会社の2社で日本の航空機全製造機数の6割以上を  
製造しました。

—中島飛行機武蔵製作所について—

1937（昭和12）年、日中戦争の始まるこの年、軍部は航空機各社に対  
して増産を要求します。中島飛行機では、当初、東京製作所の拡張を  
検討しますが、周辺地域の市街地化のため断念し、北多摩郡武蔵野町に  
新工場を建設することとなります。

—中島飛行機武蔵製作所について—

＜陸軍専用工場・武蔵野製作所（のちの東工場）＞



武蔵野製作所の中庭に集められた工員たち  
(出典：富士重工株式会社社史編集委員会(1984)  
「富士重工三十年史」)

こうして、1938(昭和13)年に北多摩郡武蔵野町西窪(現緑町)に、最初に開設されたのが、陸軍専用の発動機工場である武蔵野製作所です。この場所が選ばれたのは、まとまった広い土地が得られることのほか、青梅街道を使えば荻窪にも近く、陸軍所沢飛行場や群馬県の機体組立工場への輸送にも便利だったからです。

武蔵野製作所の開設当初の建物は、時計塔を備えた本館など一部を除き、鉄骨スレートぶき、鋸屋根の平屋建ての建物であり、面積は12万㎡の大工場でした。後に工場の北側には、地下1階地上3階一部4階の鉄筋コンクリート造りで近代的な建物の組立工場や、北西側には、発動機の試運転工場が増設されます。

これらの工場建物は、地下道でつながれていました。これは工員たちが効率的に移動するためと、生産工程で排出される切子(きりこ)などの廃棄物を地下に落とし、電気トロッコで回収するためでした。

＜海軍専用工場・多摩製作所（のちの西工場）＞

一方、多摩製作所は、1941(昭和16)年に海軍専用工場として、武蔵野製作所の隣接地である北多摩郡武蔵野町関前(現八幡町)に作られました。地下1階地上3階一部4階の鉄筋コンクリート造りの近代的建物でした。建坪は5万3千㎡ながら、総床面積は23万㎡に及びました。建物は、東西に翼を広げるように、6棟が中央部で連結され、流れ作業で部品を製造し、組み立てていくシステムになっていました。中央部には、大型のエレベーターも設置されていました。

＜両工場の合併・武蔵製作所＞

武蔵野製作所と多摩製作所では、それぞれに、同じ「菜」型エンジンが盛んに製造されていましたが、陸海軍の間での秘密保持のため、二つの工場は壁で仕切れ、技術の開発から資材の調達に至るまで、別の組織として運用されていました。

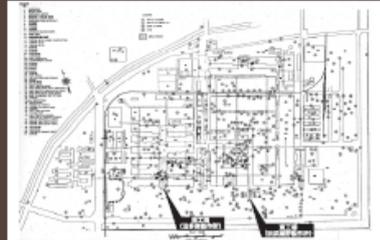
しかし、戦局の悪化する1943(昭和18)年末には、「行政査察」の結果、合併が命じられます。こうして出来たのが武蔵製作所です。合併後は、武蔵野製作所が東工場、多摩製作所が西工場と呼ばれました。

なお、1945(昭和20)年4月、重要軍需産業の国営化の方針に基づき、中島飛行機株式会社は「第一軍需工廠」となり、武蔵製作所は「第十一製造廠」となりました。

＜働いていた人は4万5千人とも、5万人とも＞

合併によって工場に働く従業員は、数万人に達しました。その中には、国家総動員法に基づく国民徴用令で動員された徴用工や、少年工として農村などで採用された青少年も多数いました。さらに、1944(昭和19)年4月になると、学徒勤労動員が本格的に始まり、中島飛行機武蔵製作所にも、大学、専門学校、中等学校などから学生・生徒が続々と動員されました。最終的には、約40校、数千人に達したと推定されます。

最盛期を迎えたこの頃、中島飛行機武蔵製作所には、「一機でも多く、戦地に」という掛け声の下に、4万5千人から5万人が、2交代あるいは3交代で働き、24時間体制で操業していました。



中島飛行機武蔵製作所 工場配置図(米軍資料)

—B29のマリアナ基地配備と日本本土空襲—

一方、アメリカ軍は、1944(昭和19)年6月半ば、日本の南、約2,400kmに位置するマリアナ諸島サイパン島に上陸し、7月には占領しました。続いて、アメリカ軍は、グアム島、テナン島も占領し、これらの島々に大型爆撃機B29の基地を建設します。

B29は、4つの高出力エンジンを備え、1万mの高高度でも飛行できる性能を持ち、マリアナ諸島から発進して、宮城県以南の日本本土を爆撃し、再びマリアナ基地に戻ることができる航続能力を備えていました。原爆の投下を行ったのも、この爆撃機です。



マリアナ諸島と日本本土空襲の関係

アメリカ軍はサイパン島占領後、1944(昭和19)年10月頃には基地を整備し、B29の配備を開始しました。11月になると偵察機を飛ばし、日本本土の詳細な空中写真を撮影します。こうして、1944(昭和19)年11月24日には、マリアナ基地配備のB29が、最初に日本本土で空襲を行いました。この空襲の第一目標が中島飛行機武蔵製作所でした。



1944年11月24日 B29に空襲をうける中島飛行機武蔵製作所(米軍資料)

空襲は、その後、12月27日(第3回)、翌年1月9日(第4回)にもありました。

これら4回の空襲は、「高高度昼間精密爆撃」といって、高度約1万m上空から、目標である工場を狙って爆弾を投下する方法で実施されました。しかし、実際には精度が悪く、工場の破壊という目標には遠く及ばないものでした。

＜9回に及んだ空襲＞

① 高高度精密爆撃=初期の空襲(4回)

1944(昭和19)年11月24日の初めての空襲では、工場内だけでも57名が犠牲となり、負傷者も多数に及びました。12月3日には第2回の空襲があり、この空襲でも60名が犠牲になりました。特に12月3日には勤労動員の学生・生徒も十数名が亡くなり、また武蔵野町でも、この日、初めて市民の犠牲者が出ました。

② 海軍航空母艦から発進した小型機による空襲

1945(昭和20)年2月半ば、アメリカ軍は、日本本土から南に約1,250kmに位置する硫黄島への上陸作戦を実施します。この作戦に当たり、海軍航空母艦(空母)に搭載された多数の小型の爆撃機(艦載機という)によって、関東地方のおもな軍事施設および軍需工場が激しく攻撃されました。その数は1千機といわれ、2月16~17日の2日間にわたって行われました。

中島飛行機武蔵製作所でも、2月17日に3隻の空母から発進した63機の爆撃機によって、低い高度から爆弾やロケット弾を投下されました。そのため、この日だけで、工場内で80名が犠牲となったほか、建物も大きな損害を受けました。これは9回の空襲の中で最大の被害でした。

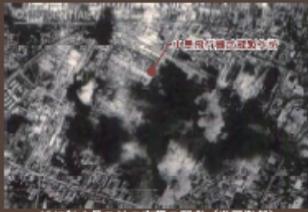
アメリカ軍の空襲は、この作戦が契機の一つとなって大きく転換していきます。すなわち、B29による空襲も高度が下げられ、爆弾も大量化、大型化していきます。3月10日、東京下町に対する空襲(東京大空襲)は、夜間に低高度から市街地に対して、大量の焼夷弾を使った空襲であり、多くの市民が犠牲になりました。

—B29のマリアナ基地配備と日本本土空襲—

③ 激しかった4月の空襲

中島飛行機武蔵製作所をはじめとする多摩地域の軍需工場に対しても、4月に激しい空襲が立て続けに行われました。まず、4月2日の未明に、低高度から大量の爆弾が投下されました。しかし、工場内では、運動場（現在の武蔵野陸上競技場）から武蔵第一青年学校（前中島飛行機株式会社武蔵野青年学校。現武蔵野市立第四中学校）にかけて落下しただけで、ほとんどの爆弾は、広く北多摩東部の畑地や市街地に落ちました。そのため、現在の練馬区、西東京市を中心として、多くの市民が犠牲となりました。

4月7日および12日は、硫黄島から戦闘機P51の援護をともなってB29が飛来し、昼間に中高度から大型の1トン爆弾が多数投下されました。7日は工場内に集中しましたが、12日は工場を大きく逸れ、田無駅北側の市街地で多数の犠牲者を出したほか、関前高射砲陣地に落下し、兵士や作業員が多数犠牲となりました。



1945年4月7日の空襲の写真（米軍資料）



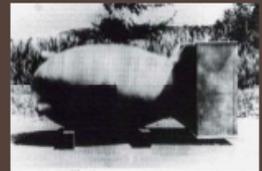
4月12日の空襲で落下していく1トン爆弾。右上は焼跡水場（米国立公文書館所蔵・工藤祥三氏提供）

④ 原爆模擬爆弾と最後の空襲

その後、中島飛行機武蔵製作所に対する空襲は、しばらくありませんでしたが、4月以降は、硫黄島からP51戦闘機が飛来するようになり、各地で機銃掃射が行われるようになります。6月には沖縄戦が終結、いよいよアメリカ軍の日本本土への上陸＝「本土決戦」が迫る中、全国各地の都市が、焼夷弾の空襲を受けるようになります。また、これと並行して、軍需工場などへの空襲も激しさを増しました。

7月末からは、原爆投下のための特殊部隊によって、原爆の投下訓練とデータの収集のため、全国で約50か所に原爆模擬爆弾（ハンブキン爆弾）が投下されました。原爆模擬爆弾とは、長崎型原爆と同じ形の爆弾で、そこに通常の爆薬を充填したものです。7月29日、そのうちの1発が中島飛行機武蔵製作所をめがけて投下されました。しかし、目標をはずれて、現在の西東京市御沢に落下し、農作業中の女性と子どもが亡くなりました。

1945（昭和20）年8月6日、広島に原爆が、同9日、長崎に原爆が投下されます。その間にも、全国各地で激しい空襲が繰り返されていました。しばらく空襲のなかった中島飛行機武蔵製作所にも、8月8日、西工場を狙った空襲が行われました。鉄筋コンクリート3階建ての西工場の3棟目東側は、この空襲で完全に破壊されました。しかし、この日の空襲でも、工場をはずれた爆弾が関前などに落下し、大勢の市民が犠牲となりました。なお、空襲が始まると、工場疎開も行われました。疎開先は、浅川（現八王子市）や大谷（栃木県）のような地下工場を主としながら、産業大学（現一橋大学）、奥亜専門学校（現亜細亜大学）などの学校の施設や町工場などでしたが、工場の分散や資材不足で生産能力は著しく低下しました。



原爆模擬爆弾（通称ハンブキン爆弾）（工藤祥三氏提供）



1945年8月8日の空襲の写真（米議会図書館 所蔵）

<合計9回の空襲の損害状況>

日付	損害 (%)			死者 (名)	負傷者 (名)
	建物	設備	機械		
1944年11月24日	1	0	24	57	75
1944年12月3日	5	2	0.1	60	21
1944年12月27日	5	2	0.9	8	40
1945年1月9日	2	0	0.2	6	8
1945年2月17日	25	5	3.2	80	115
1945年4月2日	4	0	1.1	3	2
1945年4月7日	10	0	0.6	1	1
1945年1月12日	10	5	0.5	1	1
1945年8月8日	60	80	0	4	3
合計	•	•	•	220	266

※米軍資料より作成。ただし、1945年4月2日は、空襲に空襲のあった時期に改めたため、実資料では4月1日である。（出典：牛田守彦（2011）「戦時下の武蔵野1」よんじん出版）

— 戦後の歩み —

1945（昭和20）年8月15日、日本は降伏し、長い戦争は終わりました。武蔵製作所は、激しい空襲のため、工場として再開されることはありませんでした。しかし、鉄筋コンクリート造りの建物は、多くが改修され、再利用されます。東工場が増設された北側の組立工場は、1950（昭和25）年に移転してきた電気通信省（電電公社を経て、現NTT株式会社となる）「電気通信研究所2号館・3号館」となりました（2001（平成13）年解体）。また、武蔵第一青年学校（旧武蔵野青年学校）校舎は、慶応大学医学部による一時利用を経て、1953（昭和28）年には、武蔵野市立第四中学校の校舎（旧校舎）となります。西工場は、サンフランシスコ平和条約で駐留を続けた在日米軍立川基地のための住宅「米軍住宅グリーンパーク」となりました。

東工場の工具工場の一角にあった変電室は、1956（昭和31）年に建設された都営武蔵野第二アパートの管理事務所棟として再利用されました（この説明板の場所に建っていましたが、2015（平成27）年に解体）。現在はこれらすべてが姿を消しています。

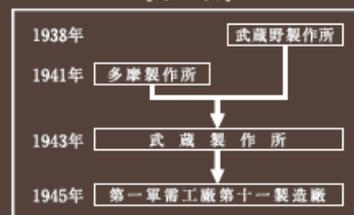
中島飛行機武蔵製作所の跡地は、東工場部分は都営アパートに、西工場部分は都立武蔵野中央公園と都立武蔵野北高等学校、東工場北側の組立工場やエンジン試運転場は、NTT武蔵野研究開発センターなどに生まれ変わっています。また、工場の敷地では、現在UR都市機構武蔵野緑町パークタウンや武蔵野市役所がそれに該当します。武蔵野陸上競技場は、中島飛行機武蔵製作所の運動場でした。なお、UR住宅の場所は、「東京スタジアム・グリーンパーク」という野球場が作られましたが、砂ぼこりがひどく、1951（昭和26）年の短い期間だけ実働し、廃止されました。

西工場は、1953（昭和28）年に米軍住宅グリーンパークとして改修の上、利用されますが、返還を求める東京都と都民の運動が実り、1973（昭和48）年に返還が決定、1977（昭和52）年に解体され、1989（平成元年）年に都立武蔵野中央公園として開園されました。原っぱのままの広大な公園は、市民の要求が実ったものです。

子どもたちの歓声があふれる、この公園からは、工場の大きさを感ずるだけで、激しい空襲を想像することはほとんどできません。この公園は、戦争から平和への時代の移り変わりを象徴するものといえるでしょう。

資料提供 武蔵野市

【年表】



1952年頃の西工場の廃墟（現武蔵野中央公園）、電気通信研究所（1950年開設）、グリーンパーク野球場（1951年開設） 越沼好二氏撮影



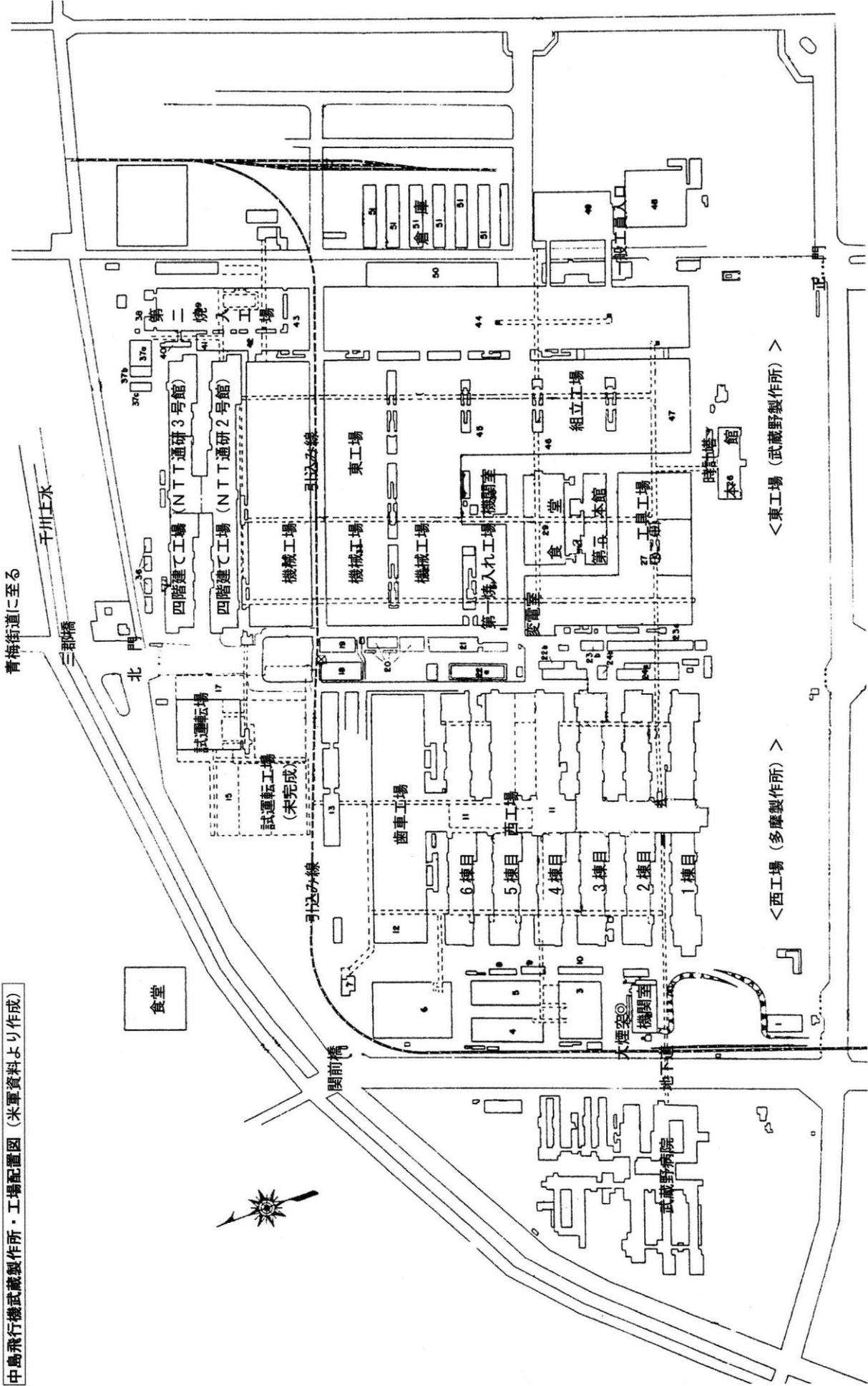
# 三年表・工場配置図



## 戦争関連年表

西暦	元号	おもな出来事	武蔵野町の出来事
1931	昭和6	9/18 柳条湖事件から「満州事変」	前年に横河電機が転入
1932	昭和7	「満州国」建国 リットン調査団 5.15 事件 犬養首相暗殺	
1933	昭和8	2月 小林多喜二虐殺 8月 関東軍特殊演習	帝都電鉄、渋谷一井の頭公園間が開通 (翌年吉祥寺まで延長)
1934	昭和9	東北で冷害 昭和恐慌	
1935	昭和10	天皇機関説事件	
1936	昭和11	2.26 事件 11月 独防共協定	
1937	昭和12	7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ	
1938	昭和13	国家総動員法、成立 (戦時体制の強化)	中島飛行機武蔵野製作所、開設
1939	昭和14	5月ノモンハン事件 国民徴用令 独ソ不可侵条約 ドイツがポーランド侵攻 (第二次大戦開始)	中島航空金属田無製造所、開設
1940	昭和15	日独伊三国軍事同盟 皇紀 2600 年式典	
1941	昭和16	12月 アジア太平洋戦争、開戦	中島飛行機多摩製作所、開設
1942	昭和17	4月 ドゥーリットル空襲 (日本初空襲) 6月 ミッドウェー海戦	
1943	昭和18	2月 ガダルカナル島撤退 山本五十六戦死 10月 学徒出陣 東京都制施行	10月 中島武蔵野と多摩が合併
1944	昭和19	4月 学徒勤労動員の通年動員が始まる マリアナ沖海戦敗北 6月 米軍サイパン島上陸 8月 学童集団疎開、始まる 11/24 マリアナ諸島から B29 初空襲	11/24 中島飛行機武蔵製作所、初空襲 その後、12/3、12/27 にも空襲
1945	昭和20	2月 硫黄島上陸 3/10 東京大空襲 4月 沖縄戦 5月 ドイツ降伏 6月 沖縄戦終結 7月 ポツダム宣言 8/6 広島 原爆投下 8/9 長崎 原爆投下、ソ連対日参戦 8/15 終戦の詔勅、GHQ による占領、 五大改革指令	中島飛行機への空襲、続く 1/9 空襲 2/17 艦載機による空襲 4/2 夜間空襲 4/7、12 1 トン爆弾の空襲 8/8 1 トン爆弾の空襲 米国戦略爆撃調査団、来所
1946	昭和21	天皇の人間宣言 戦後初の衆議院選挙 公職追放 11/3 日本国憲法、公布	
1947	昭和22	2/1 ゼネストの中止 トルーマンドクトリン 5/3 日本国憲法発布、教育基本法制定	11/3 市制施行 人口 6 万 3 千人
1948	昭和23	南北朝鮮分断	市営運動場、開設
1949	昭和24	中華人民共和国、建国 下山事件、三鷹事件、松川事件	
1950	昭和25	警察予備隊、発足	電気通信省「電気通研究所」開所
1951	昭和26	サンフランシスコ講和条約、締結	東京スタジアム・グリーンパーク野球場
1952	昭和27	サンフランシスコ講和条約、発効 日米安全保障条約、発効	

中島飛行機武蔵製作所・工場配置図（米軍資料より作成）



↓ 鉄道引込み線（中央線・武蔵境駅に至る）

<西工場（多摩製作所）>

<東工場（武蔵野製作所）>

中島飛行機武蔵製作所 工場配置図 『米軍戦路爆撃調査団報告書』（国立国会図書館憲政資料室所蔵）より



# 四 平和に関する宣言、条例



## **世界連邦に関する宣言**

武蔵野市は、世界の恒久平和と人類永遠の繁栄を保障する世界連邦の建設に同意し、武力国家の対立を解消して、英知と友愛に基づく世界の新しい秩序の実現を希求する。人類最初の原爆被災国として、また戦争放棄を憲法に明記した国として提唱し得る最適の立場にあることを確信し、この宣言を行ない、他の宣言都市と相携えて、世論を喚起し、これを国政に反映せしめ、速やかに国家宣言を行うとともに、進んで現行の国連憲章の改正により世界連邦の実現を期するものである。右宣言する。

昭和35年6月28日

武蔵野市議会

## **武蔵野市非核都市宣言**

戦争の惨禍を防止し、恒久平和を実現することは、全人類が切実に念願するところである。

核兵器保有国間で核軍拡競争が激化している今日、とりわけ核戦争を回避し、原水爆の恐れのない世界を確立することは、緊急かつ重大な課題である。

武蔵野市は、平和を希求する世界連邦に関する宣言都市として、人間が人間を滅ぼす危険を防ぎ、人類永遠の平和を樹立するため、非核三原則の完全実施を願い、最大限の努力を傾注するものである。

ここに、われわれは、平和のために貢献する決意を表明するとともに、武蔵野市が非核都市となることを宣言する。

昭和57年3月29日

武蔵野市議会

## 武蔵野市平和の日条例

(平成 23 年 9 月 22 日条例第 23 号)

武蔵野市は、戦禍により犠牲になられた方々を悼み、戦争の悲惨さと平和の尊さを次世代に語り継いでいくとともに、市内に初空襲があった昭和 19 年 11 月 24 日を後世に伝えていくため、ここに武蔵野市平和の日を定め、市民とともに国際相互理解を推進し、恒久平和の実現を目指すことを誓う。

(平和の日)

第 1 条 武蔵野市平和の日（以下「平和の日」という。）は、11 月 24 日とする。

(平和の日事業)

第 2 条 武蔵野市は、平和の日を中心として、平和意識の高揚を図るための事業を実施する。

(委任)

第 3 条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が別に定める。

付 則

この条例は、公布の日から施行する。



【編集後記に代えて】

「戦争の記憶」を「平和な未来」につなげたい

『武蔵野市から伝える戦争体験記録集第IV集』をお届けします。ここには、十六名の方の戦争体験および戦後体験が収録されています。なかには、よくぞ生きて体験を伝えて下さった、と思わずにいられないような過酷な体験もあります。戦争が終わった戦後も貧困や差別という苦しい体験が待っていました。すべてが戦争のせいなのだ、ということがわかります。戦争ほど悲惨なものはなく、「家族が一つ屋根の下で一緒に暮らす」という、ささやかな幸せさえも、永遠に奪い去るのが戦争なのだ、あらためて強く感じさせられます。とりわけ、広島での原爆被爆体験は、言語を絶するものです。戦争は二度としてはならない、これからも平和な世の中であって欲しい、そんな叫びが聞こえてきます。

この体験集を若い世代の方々に読んでもらいたいと思います。おそらく、学童疎開、縁故疎開、学徒勤労動員、特攻隊、海軍、陸軍、軍の学校、焼夷弾と爆弾、原爆など、なかなか理解できないこともたくさんあると思います。学校で歴史を教えている私ですら、初めて知ることがたくさんありました。でも、この体験記録集には、他にはない特色があります。それは、体験記をお寄せ下さったすべての方が、この武蔵野市に縁あって暮らしている方だという共通点です。ぜひ、この身近な存在である一六名の方々の体験を通じて、さらに学び、知ってほしいと強く願っています。

世界はいま、大きな「曲がり角」に立たされています。ウクライナをはじめ、紛争が続ぎ、核兵器の使用が取り沙汰されています。この日本の周辺のアジアも、かつてなく緊張が高まっています。でも、絶望からは何も生まれません。一人ひとりが、「平和って何だろう」、「戦争ってどうして起こるのかな」という課題を、立ち止まって考えること、それが平和な未来へ向かう希望の第一歩となると思います。この記録集は、そんな機会を与えてくれる「大切な贈り物」だと思います。

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員  
(法政大学中学高等学校・教諭)

牛田 守彦

